気仙沼市文化財調査報告書第２０集

猿喰東館跡

－防災集団移転促進事業（最知川原第二地区）に伴う発掘調査報告書－

２０２０

気仙沼市教育委員会

気仙沼市文化財調査報告書第20集　猿喰東館跡　二〇二〇　気仙沼市教育委員会

猿喰東館跡

－防災集団移転促進事業（最知川原第二地区）に伴う
発掘調査報告書－

２０２０

気仙沼市教育委員会

刊行にあたって

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が引き起こした巨大津波は、気仙沼市においても甚大な被害をもたらしました。住家被災棟数約 16,000 棟、1,200 人を超える尊い命が犠牲となりました。

未曾有の大震災によって、高台への防災集団移転、災害公営住宅や個人住宅の再建等が必要となりました。本市には、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など 180 か所以上の遺跡が周知されていますが、その多くは沿岸部の丘陵地に立地しています。そのため、津波の浸水域を避けた土地を求める場合、必然的に埋蔵文化財との関わりが増してきます。

本市では、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との調整を図るため、職員の再任用や任期付職員の採用に加え、他自治体へ職員の派遣要請を行い、埋蔵文化財の発掘調査に対応する専門職員を確保するほか、文化庁、宮城県教育委員会等の支援により、調査体制を整備してまいりました。

本書は、平成 26 年度に、国の東日本大震災復興交付金事業として実施した猿喰東館跡（防災集団移転促進事業〔最知川原第二地区〕）の発掘調査成果をまとめた報告書です。猿喰東館跡は、これまでも何回か調査を行い、堀跡や建物跡などが発見されており、館跡として機能していたころの様子が徐々に明らかになりつつあります。また、今回の調査では、市内でもめずらしい製塩土器も出土しました。

この報告書が市民の皆さまはじめ多くの方々に活用され、地域の歴史を明らかにする一助となるとともに、埋蔵文化財に対するご理解がいっそう深まりますよう願ってやみません。

最後になりますが、遺跡の保存にご理解いただき、また、発掘調査に際してご協力をいただきました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げる次第であります。

令和２年３月

気仙沼市教育委員会
教育長　　小山　　淳

例　　言

1．本書は、東日本大震災の復興事業の防災集団移転促進事業（最知川原第二地区）に係る猿喰東館跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、気仙沼市教育委員会教育部生涯学習課が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課〔現、文化財課〕の協力のもと実施した。なお、調査は、平成 26 年 11 月 25 日から平成 27 年 1 月 16 日まで確認調査を実施し、引き続き同年 1 月 19 日から 2 月 13 日まで本発掘調査を行った。

3．遺跡の略称は SAR とし、遺物の注記にあたっては、略称・地点・日付を併記した。

4．測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。

5．本書の執筆は、第３章のほかは鈴木實夫・石川 郁が行い、編集は石川が行った。

6．自然科学分析（放射性炭素年代測定）は、株式会社 加速器分析研究所に委託した。

7．遺物の実測・トレース・拓本・写真撮影は、令和元年度に株式会社 吉田建設に委託した。

8．本調査において記録した諸資料及び検出された遺物は、気仙沼市教育委員会で保管している。

9．発掘調査から報告書の作成に至るまで、次の方々や諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（五十音順　敬省略）

相原　淳一　　細川　金也
株式会社小松工業　　気仙沼市（建設部防災集団移転推進課〔現、住宅支援課〕）
公益社団法人気仙沼市シルバー人材センター　　大成建設株式会社

凡　　例

1．遺 構 番 号　　遺構番号は、遺構の種類ごとに検出順に付した。また、整理調査の過程で遺構の種別を変更した場合は、修正し、それまでの番号は欠番とした。

2．図　　版

- 方位は、原則として図版左上に方位円によって示した。この方位は、真北を指す。
- 縮尺は、各図版に示した。
- 土層堆積状況図の標高の基準面は、東京湾平均海面（Tokyo Peil：T.P.）である。また、土層説明の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修，1970）を使用した。
- 遺構図版のトーンは、以下のとおりである。

柱当り　　焼土範囲

目　　次

刊行にあたって
例言・凡例
目　　次
調査組織

第１章　調査の概要 …… 1
第１節　調査概要 …… 1
１．調査に至る経緯 …… 1
２．確認調査の経過と成果 …… 2
３．調査の目的 …… 2
４．調査の方法と経過 …… 3
（１）発掘調査 …… ３／（２）整理調査・報告書作成 …… 4
第２節　地理的・歴史的環境 …… 4
１．地理的環境 …… 4
２．歴史的環境 …… 5
３．周辺の遺跡 …… 5

第２章　発掘調査の成果 …… 7
第１節　遺跡の概要 …… 7
１．概観 …… 7
２．基本層序 …… 7
第２節　検出された遺構と遺物 …… 10
１．段切状遺構 …… 10
（１）SX1 …… 10／（２）SX2 …… 11／（３）SX3 …… 12
２．掘立柱建物跡（SB1） …… 13
３．柵列（SA1） …… 17
４．焼土跡 …… 18
（１）SX5 …… 18／（２）SX6 …… 19／（３）SX7 …… 20／（４）SX8 …… 20
５．土坑 …… 21
（１）SK1 …… 21／（２）SK2 …… 22／（３）SK3 …… 22／（４）SK6 …… 23
６．竪穴建物跡（SI2） …… 24
７．小穴群 …… 27
８．遺構外出土遺物 …… 29
９．その他の遺構 …… 30

第３章　自然科学分析 ―猿喰東館跡における放射性炭素年代（AMS 測定）― …… 31

第４章　まとめ …… 33

報告書抄録

挿図目次

第１図　調査地点位置図 …… 1
第２図　トレンチ設定図 …… 2
第３図　グリッド設定図 …… 3
第４図　気仙沼市位置図 …… 4
第５図　周辺の遺跡 …… 6
第６図　調査地点位置図 …… 7
第７図　猿喰東館跡 遺構配置図 …… 8
第８図　基本層序 …… 9
第９図　段切状遺構 平面図 …… 10
第10図　SX1 土層堆積状況図 …… 11
第11図　SX2 土層堆積状況図 …… 11
第12図　SX3 土層堆積状況図 …… 12
第13図　SB1 平面図および断面図 …… 14
第14図　SB1 柱穴土層堆積状況図 …… 15
第15図　SB1 出土遺物図 …… 16
第16図　SA1 平面図 …… 17
第17図　SA1 柱穴土層堆積状況図 …… 17
第18図　SX5 平面図および土層堆積状況図 …… 18
第19図　SX6 平面図および土層堆積状況図 …… 19
第20図　SX7 平面図および土層堆積状況図 …… 20
第21図　SX8 平面図および土層堆積状況図 …… 20
第22図　SK1 平面図および土層堆積状況図 …… 21
第23図　SK2 平面図および土層堆積状況図 …… 22
第24図　SK3 平面図および土層堆積状況図 …… 23
第25図　SK6 平面図および土層堆積状況図 …… 24
第26図　SI２平面図および土層堆積状況図 …… 25
第27図　SI２付帯施設土層堆積状況図 …… 25
第28図　SI２出土遺物 …… 27
第29図　Ⅲ層検出小穴位置図 …… 27
第30図　Ⅲ層検出小穴平面図および土層堆積状況図 …… 28
第31図　遺構外出土遺物 …… 29
第32図　暦年較正年代グラフ（参考） …… 32

表目次

第１表　SB1 柱穴一覧 …… 13
第２表　SA1 柱穴一覧 …… 17
第３表　SI２柱穴一覧 …… 24
第４表　Ⅲ層検出小穴一覧 …… 28
第５表　検出遺構一覧 …… 30
第６表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値） …… 32
第７表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 測定値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代） …… 32

写真目次

写真１　SX1 土層堆積状況（西から） …… 11
写真２　SX2 土層堆積状況（西から） …… 11
写真３　SD2 土層堆積状況Ｃ（西から） …… 12
写真４　SD2 土層堆積状況Ｄ（西から） …… 12
写真５　SD2 土層堆積状況Ｅ（南から） …… 13
写真６　SB1 全景（南東から） …… 14
写真７　SB1 全景（南西から） …… 14
写真８　P43 土層堆積状況（南から） …… 15

写真 9　P44 土層堆積状況（南から）…… 15
写真 10　P45 土層堆積状況（南から）…… 16
写真 11　P48 土層堆積状況（南から）…… 16
写真 12　P47 土層堆積状況（南から）…… 16
写真 13　P70 土層堆積状況（西から）…… 16
写真 14　P72 土層堆積状況（西から）…… 16
写真 15　P41 遺物出土状況（南から）…… 16
写真 16　SB1 出土遺物 …… 16
写真 17　SA1 全景（西から）…… 17
写真 18　P89 土層堆積状況（南から）…… 18
写真 19　P90 土層堆積状況（北から）…… 18
写真 20　SX5 土層堆積状況（西から）…… 19
写真 21　SX6 遺構検出状況（西から）…… 19
写真 22　SX6 出土遺物 …… 19
写真 23　SX7 遺構検出状況（西から）…… 20
写真 24　SX8 遺構検出状況（西から）…… 21
写真 25　SX8 完掘状況（南から）…… 21
写真 26　SK1 土層堆積状況（南から）…… 22
写真 27　SK1 完掘状況（東から）…… 22
写真 28　SK2 土層堆積状況（南から）…… 22
写真 29　SK3 土層堆積状況（西から）…… 23
写真 30　SK3 完掘状況（南から）…… 23
写真 31　SK6 土層堆積状況（西から）…… 24
写真 32　SK6 完掘状況（南から）…… 24
写真 33　SI2 土層堆積状況（西から）…… 26
写真 34　SI2 完掘状況（南から）…… 26
写真 35　P78 土層堆積状況（北から）…… 26
写真 36　P79 土層堆積状況（西から）…… 26
写真 37　P95 土層堆積状況（南東から）…… 26
写真 38　P96 土層堆積状況（南東から）…… 26
写真 39　SK7 土層堆積状況（西から）…… 26
写真 40　SK7 完掘状況（東から）…… 26
写真 41　SI2 出土遺物 …… 27
写真 42　P54 土層堆積状況（東から）…… 29
写真 43　P57 土層堆積状況（南から）…… 29
写真 44　P59 土層堆積状況（南から）…… 29
写真 45　P58 土層堆積状況（南から）…… 29

調査体制

発掘調査（平成 26 年度）

【調査主体】気仙沼市教育委員会

教　育　長　　白 幡　勝 美

教 育 次 長　　小松　三喜夫

【調査担当】気仙沼市教育委員会　生涯学習課

生涯学習課長　　菅原　京子

課 長 補 佐　　鈴木　實夫（再任用）

主幹兼文化振興係長　　昆野　賢一

主　　幹　　幡野　寛治　　原田　享二（市任期付職員）　　野﨑　進（山梨県笛吹市派遣）

主　　査　　森　幸一郎（鹿児島県派遣）　　石川　郁（市任期付職員〔1 月から〕）

千葉　絢子

【発掘作業員】公益社団法人気仙沼市シルバー人材センターに委託

小野寺　偉功雄　　小野寺　功　　金　正男　　佐藤　秀一　　千葉　春夫

常世　俊一　　畠山　孝雄　　三浦　重雄　　守　千昭　　守　吉昭

整理調査・報告書作成（令和元年度）

【調査主体】気仙沼市教育委員会

教　育　長　　小山　淳

教 育 部 長　　池田　修

【調査担当】気仙沼市教育委員会　教育部生涯学習課

生涯学習課長　　熊谷　啓三

課長補佐兼文化振興係長　　幡野　寛治

技 術 補 佐　　鈴木　實夫（市任期付職員）

主　　幹　　原田　享二（市任期付職員）　　石川　郁（市任期付職員）

青木　昭和（大阪府富田林市派遣）　　橋垣　克義（神奈川県横浜市派遣）

技 術 主 幹　　熊谷　満（市任期付職員）　　須藤　好直（市任期付職員）

佐藤　典邦（市任期付職員）

主　　査　　加藤　成巳（岩手県一関市派遣）

技 術 主 査　　鈴木　志穂

技　　師　　森　千可子

（アンダーライン表示は調査担当者）

第１章　調査の概要

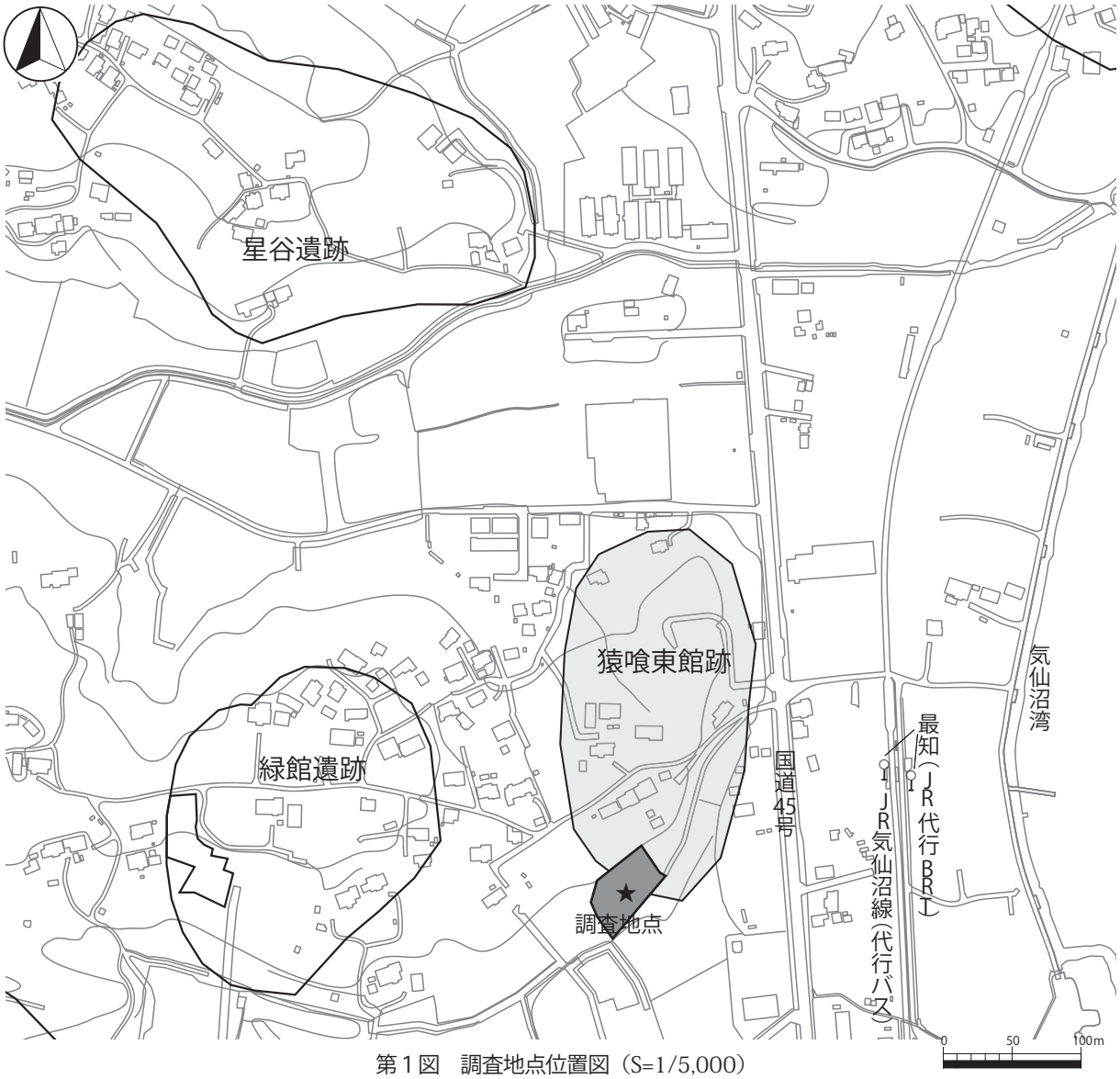
第１節　調査概要

１．調査に至る経緯

平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災において、気仙沼市は 15,000 棟以上の住家が被災し、人的被害も、行方不明者を含めるとおおよそ 1,500 人にもおよぶといった、甚大な被害を受けた。

気仙沼市は、平成 23 年 10 月７日に「気仙沼市震災復興計画」を策定し、「津波死ゼロのまちづくり」を目標のひとつに掲げ、集団移転を重点事業に盛り込んだ。

その後、国土交通省は、それまで東日本大震災に伴う防災集団移転について、５戸以上がまとまった団地として移転することを前提としていたが、それを緩和し、新たな団地を造らず、既存の団地、既存の集落に点在する空き地を活用することとした特例措置を認めることとした。それを受けて、平成 24 年４月４日、最知川原第二地区防災集団移転協議会（以下、「協議会」という。）から、気仙沼市岩月宝ヶ



第１図　調査地点位置図（S=1/5,000）

沢３世帯、同岩月星谷３世帯、同最知北最知５世帯の計３か所 11 世帯について移転申し出があった。

同年７月 12 日、埋蔵文化財との関わりを確認するために、宮城県教育庁文化財保護課（以下、「県文化財保護課」という。〔現、文化財課〕）、気仙沼市教育委員会（以下、「市教委」という。）、気仙沼市建設部用地課の三者で現地踏査および協議を行った。その結果、岩月星谷については星谷遺跡、最知北最知については緑館遺跡が所在していることを確認した。その後、同年８月、協議会から気仙沼市に、２世帯が最知北最知内に新たに移転したい旨、追加申し出があった。そのため、最終的に４か所 13 区画を一団地とすることとなった。なお、新たに追加された地点には、猿喰東館跡が所在している。

平成 26 年４月 16 日付けで遺跡が所在する３地区について、「最知川原第二地区防災集団移転事業と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が気仙沼市長〔担当　建設部防災集団移転推進課（現　住宅支援課）〕（以下、「事業者」という。）から市教委に提出された。市教委は、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である猿喰東館跡（県遺跡番号　59045）に該当していることから、確認調査が必要である旨意見を添えて、宮城県教育委員会（以下、「県教委」という。）に進達した。このことにより、同月 25 日付けで県教委から事業者に、確認調査を実施する必要がある旨回答があった（文第 236 号）。

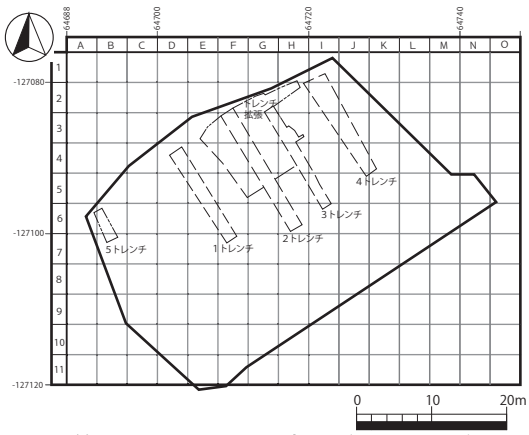
つづいて、同年 10 月 15 日、文化財保護法第 94 条第１項の規定により、事業者から「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、同月 29 日付けで県教委から通知が発出された（文第 2017 号）。

以上の経緯を踏まえ、事業者と市教委で日程調整を行い、平成 26 年 11 月 25 日から確認調査を実施することとなった。

２．確認調査の経過と成果

確認調査は、平成 26 年 11 月 25 日から平成 27 年１月 16 日に実施した。対象地（1,300㎡）内に５本のトレンチを設定した。調査面積は 109㎡を測る。

調査の結果、西側トレンチ（１・５トレンチ）においては、表土直下で地山が確認され、遺構・遺物は検出されなかった。しかし、東側トレンチ（２～４トレンチ）において、段切り状の区画や多数の小穴が検出された。そのため、一部のトレンチを拡張して遺構の広がりの確認を行った。



第２図　トレンチ設定図（S=1/1,000）

確認調査の結果を踏まえ、事業者と協議を行った結果、復興事業促進のため、設計変更は困難であることから、本発掘調査を行うこととなった。本発掘調査の範囲は、西側の２本のトレンチで遺構・遺物が全く検出されなかったことから除外することとし、東側のみとした。また、本発掘調査は、確認調査に引き続き、平成 27 年１月 19 日から開始することとした。

なお、確認調査の結果は、『気仙沼市文化財調査報告書第 14 集　気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書２』（2019）に所収している。

３．調査の目的

本調査は、防災集団移転促進事業に伴う事前調査として実施した。

本調査の目的は、当該地における埋蔵文化財の記録保存であり、発掘調査・整理調査を通じて遺構・

遺物の質・量的実態を記録することを第一とした。

また、調査の過程で、焼土跡（SX4 ～ 8）が検出されたことから、自然科学分析を行うことにより年代測定を試みた。

４．調査の方法と経過

(1) 発掘調査

本発掘調査は、確認調査に継続して、平成 27 年 1 月 19 日に開始した。

①表土掘削

1 月 21 日・28 日、重機を使用して、確認調査対象外の箇所について近・現代に堆積した表土等を取り除いた。

②遺構確認・ナンバリング

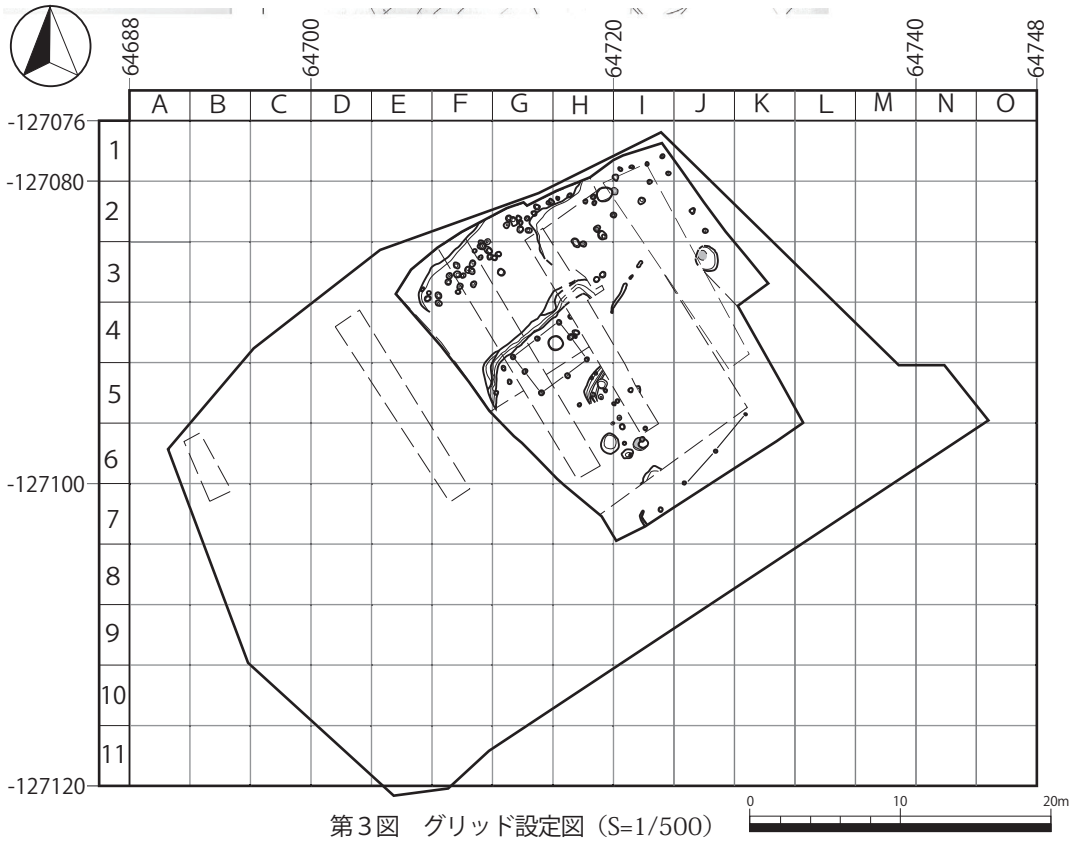
人力で遺構確認面を平坦に削り、遺構の存否と配置を確認した後、各遺構について平面形が明らかになった段階で遺構番号を付した。遺構番号は種別ごとに任意に 1 から付した。遺構種別には以下の略号を用い、略号とアラビア数字の組み合わせで呼称することとした。

遺構略号：SA　柵列，SB　掘立柱建物跡，SD　溝状遺構，SI　竪穴建物跡，SK　土坑，
SX　その他の遺構，P　小穴

なお、整理調査の段階で遺構の種別に変更が生じた場合は、振り替えは行わず、欠番とした。

③遺構調査・記録

遺構は、原則として長軸にそって半截し、断面の写真撮影、図化、土層観察の後、完掘し、完掘写真撮影を行った。また、必要に応じてエレベーション図を作成した。



第３図　グリッド設定図（S=1/500）

④遺構平面図作成

遺構平面図は、GPS 測定器で基準杭の座標を測り、トータルステーションおよび電子平板を用いて行った。測量は、最終日の２月 12 日および 13 日に行った。

以上の経過を経て、発掘調査は２月 13 日に終了した（本発掘調査実働 16 日）。また、事業者と協議の上、今回の調査において埋め戻しは行わなかった。

（２）整理調査・報告書作成

遺物洗浄・注記等の基礎整理作業は、平成 27 年度に順次行った。なお、注記に用いた遺跡略号は SAR とし、出土日付、出土地点の順に併記した。

遺構の分析等は、平成 26 年度および令和元年度に、その他の整理作業は令和元年度に行った。また、遺物の実測・トレース・写真撮影は、株式会社吉田建設に委託し、令和元年度に行った。

なお、整理作業において、４m四方のグリッドを設定した。グリッド座標は、東西方向は西からアルファベット（Ａ～Ｏ）で、南北方向は北からアラビア数字（１～ 11）で付した（第３図）。各グリッドは、アルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称することとした。

第２節　地理的・歴史的環境

１．地理的環境

気仙沼市は、宮城県の北東端に位置する。北は岩手県陸前高田市、西は岩手県一関市、南は宮城県本吉郡南三陸町に接し、東側は太平洋に面している。西側には標高 400 ～ 700m の北上山地が南北に連なり、山地から派生した丘陵が太平洋の近くまで延びている。山地を源流とする河川が太平洋に注いでいるが、小河川が多く、河口付近に小規模な沖積地が形成されている。海岸部は、入江と岬が鋸歯状に出入りする複雑に入り組んだ地形で、三陸リアス海岸とよばれている。三陸リアス海岸は、青森県八戸市から宮城県石巻市の金華山まで、総延長 600km に達する。そのうち北部は隆起海岸のため直線的であるが、岩手県宮古市以南は沈降地形のため、湾と岬が交互に連続する海岸となっている。特に、大船渡湾以南は沈降と隆起を繰り返したため、海岸線に沿って平らな丘陵が並ぶ海岸段丘を形成している。

猿喰東館跡は、気仙沼市最知北最知に所在し、JR 気仙沼線最知駅から国道 45 号を挟んだ西側の標高 10 ～ 24m ほどの海岸段丘上に立地している。

周辺の地形は、西側に岩倉山（標高 293m）があり、そこから派生する丘陵と海岸段丘が続いている。また、海岸近くは、標高２～３ｍの低地が広がり、国道沿いにはかつて住宅等が密集していたが、平成 23 年３月に発生した東日本大震災に伴う津波によりほとんどが流出した。

第４図　気仙沼市位置図

２．歴史的環境

気仙沼地域は、貞応２（1223）年に熊谷直宗が下向して以来、熊谷氏が治めていたが、正平 18・貞治２（1363）年に葛西氏に降って以後、熊谷氏は葛西氏に臣従して葛西氏の勢力下に入ることとなった。

猿喰東館跡の築城年代、城主などが明らかになる史料は少なく、詳細は判然としない。しかし、延享３（1746）年に完成した『最知村風土記』には、「一、古館壱ヶ所。猿喰館申候　館主阿部太郎左衛門申伝候　云々」と記されている。また、明和９（1772）年に完成した、仙台藩が編纂した地誌である『封内風土記』には、「猿喰館と号す　伝云う　葛西家臣阿部太郎左衛門の居りし所」と記されている。史料からは築城年代を推測することはできないが、阿部太郎左衛門が館主であった時期があることが江戸時代に記された史料により窺われる。阿部太郎左衛門はのちに米倉玄蕃と名乗る。米倉玄蕃は天正 18（1590）年に深谷で討死している。また、猿喰東館は、天正 16（1588）年の岩月の戦いで攻防の拠点となったといわれている。このことから、猿喰東館は、天正 16 ～ 18（1588 ～ 1590）年頃まで機能していたものと推測できる。

３．周辺の遺跡

気仙沼市内には 181 か所の遺跡が登録されている（2020 年３月現在）。その多くは海岸段丘上あるいは山地から派生した丘陵上に立地しており、とくに縄文時代および中世城館跡が多い。

《縄文時代》

縄文時代の遺跡は、複合遺跡も含めると市内に 73 遺跡が知られている。そのうち、19 遺跡が貝塚であり、気仙沼湾に面して立地する磯草貝塚、浦島貝塚（41）、藤ヶ浜貝塚、やや内陸に内の脇１号貝塚（51）、内の脇２号貝塚（52）、南最知貝塚（7）は、気仙沼市指定史跡に指定されている。また、田柄貝塚（45）で出土した遺物の一部が国重要文化財（考古資料）に指定されている。

《弥生時代・古代》

市内における弥生時代の遺跡は希薄で、前出の田柄貝塚や藤ヶ浜貝塚など、６遺跡で少量の弥生土器が出土している程度である。

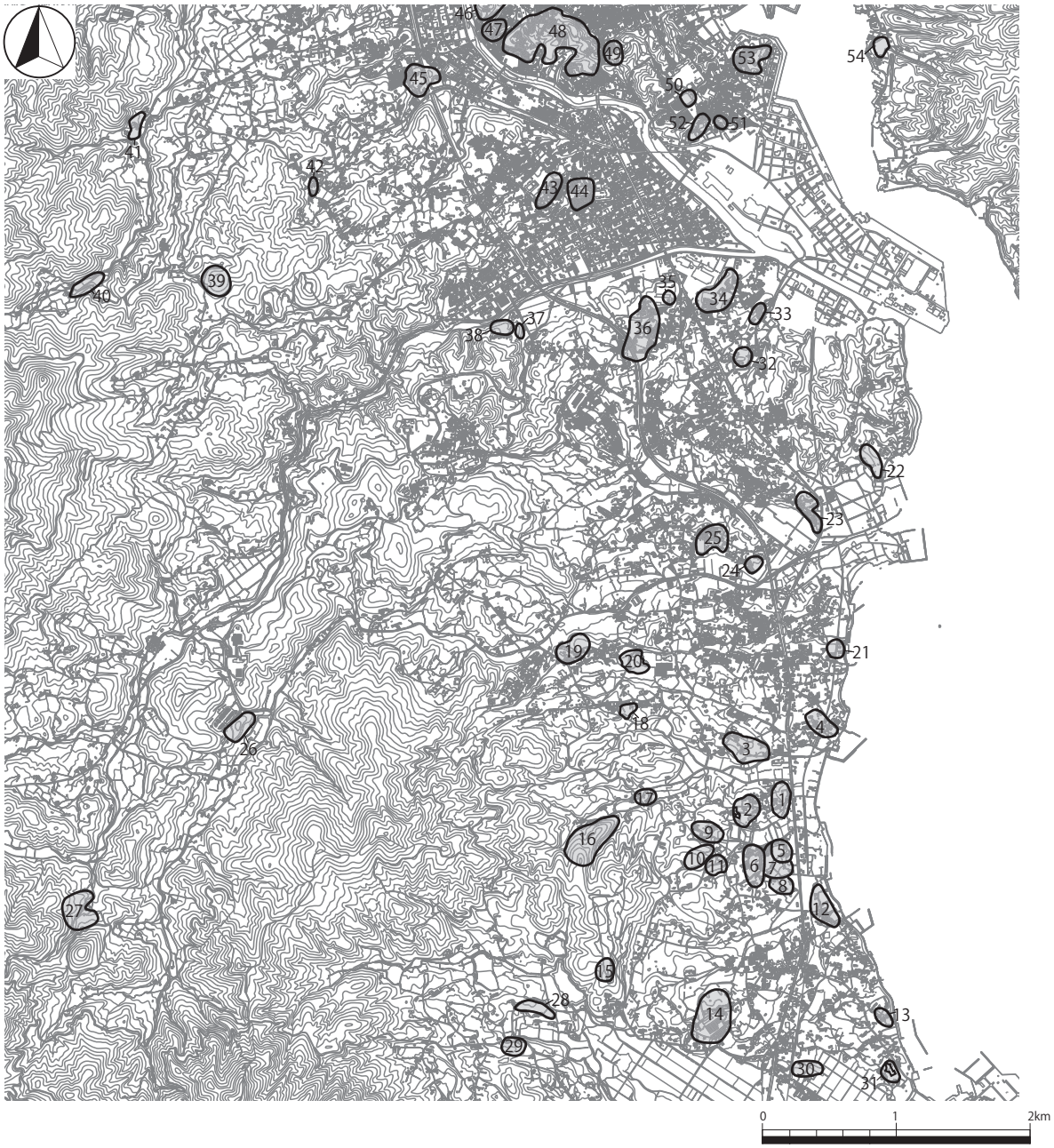
古墳時代は、市内では三島古墳群や塚沢横穴墓群で人骨や副葬品が出土している。また、塚沢横穴墓は、横穴墓が検出された北限とされている。

本遺跡周辺では、南最知貝塚（7）で古墳時代の竪穴建物跡２軒および古代の竪穴建物跡２軒検出されているほか、長磯高遺跡（８）、海蔵寺北遺跡（９）、海蔵寺遺跡（10）など、古代の遺跡が知られている。また、本遺跡に隣接する緑館遺跡（２）、星谷遺跡（３）においても、古代の竪穴建物跡が検出されている。

《中世》

市内には中世の城館跡が多く、82 遺跡が知られている。前項で述べたとおり、貞応２（1223）年に熊谷直宗が下向し、赤岩城を居城とした。その後、天文２（1533）年に葛西氏の命により熊谷直光が気仙沼熊谷氏を討伐し、長崎城（48）が熊谷氏の本城となった。

本遺跡周辺は、市内でも中世城館跡が多い地域である。本遺跡の北東 500m には相馬館跡（４）、さらに北東 500m には八幡館跡（21）、南 200m には末永館跡、南西 400m には最知中館跡（６）、その西 200m には塚館跡、南東 800m の海岸沿いには森館跡が所在している。また、本遺跡の北 2km には小屋館城跡が所在する。小屋館城跡ではこれまでの調査で大規模な堀跡が検出されている。



１猿喰東館跡（中世）　２緑館遺跡（古代）　３星谷遺跡（縄文・古代）　４相馬館跡（中世）　５末永館跡（中世）　６最知中館跡（中世）　７南最知貝塚（縄文・古墳・古代）　８長磯高遺跡（古代）　９海蔵寺北遺跡（古代）　10 海蔵寺遺跡（古代）　11 塚館跡（中世）　12 森館跡（中世）　13 長磯浜遺跡（縄文）　14 南最知城跡（中世）　15 菖蒲沢遺跡（縄文）　16 猿喰西館跡（中世）　17 荒沢遺跡（縄文）　18 長平遺跡（縄文）　19 古館跡（中世）　20 寺沢遺跡（古代・近世）　21 八幡館跡（中世）　22 大館跡（中世）　23 小屋館城跡（中世）　24 高谷遺跡（縄文）　25 高谷貝塚（縄文）　26 金取館跡（中世）　27 物見遺跡（縄文）　28 道貫館跡（中世）　29 石川原遺跡（縄文）　30 内田遺跡（縄文）　31 堀合館跡（中世）　32 老の松遺跡（縄文）　33 松岩貝塚（縄文）　34 館森館跡（中世）　35 赤岩遺跡（縄文）　36 石兜貝塚（古代･中世）　37 平貝窯跡（近世･近代）　38 平貝遺跡（縄文）　39 和野館跡（中世）　40 金成沢南遺跡（縄文）　41 金成沢遺跡（縄文）　42 境貝塚（縄文）　43 九条遺跡（縄文・弥生・古代）　44 谷地館跡（中世）　45 田柄貝塚（縄文・弥生）　46 新庄館跡（中世）　47 旭ヶ丘遺跡（縄文）　48 長崎城跡（古代・中世）　49 気仙沼古館跡（中世）　50 気仙沼中学校前遺跡（縄文）　51 内の脇１号貝塚（縄文）　52 内の脇２号貝塚（縄文）　53 細浦城跡（中世）　54 浦島貝塚（縄文）

第５図　周辺の遺跡（S=1/50,000）

第２章　発掘調査の成果

第１節　遺跡の概要

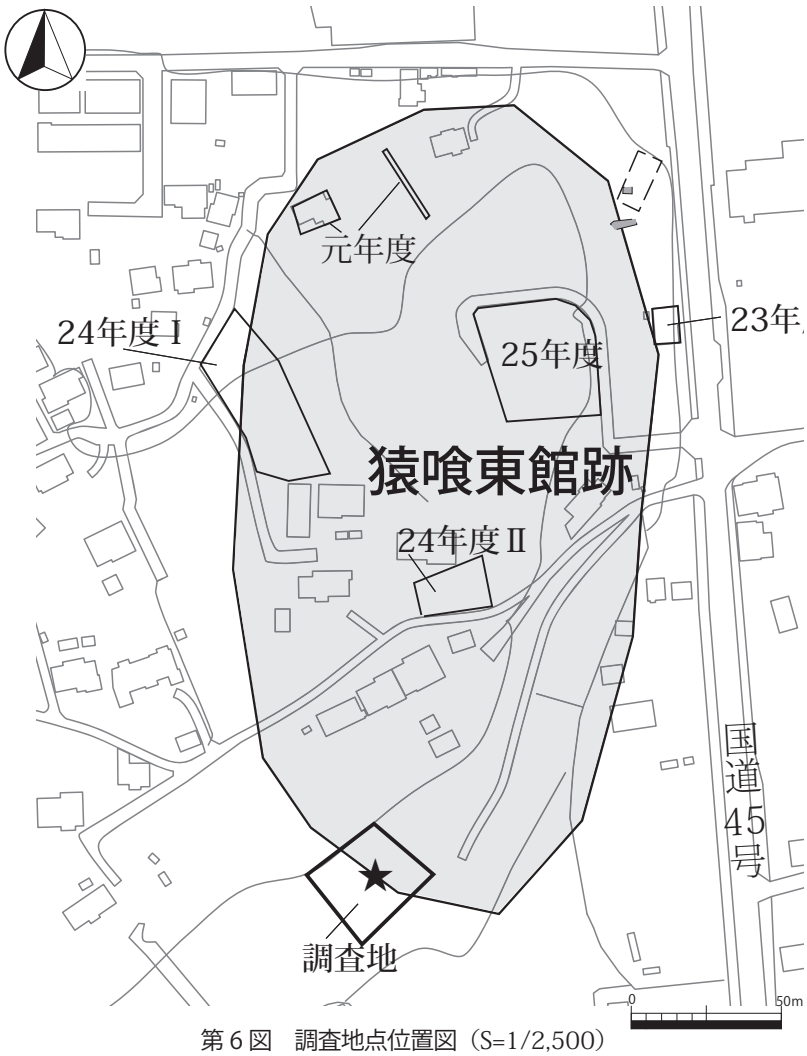
１．概観

猿喰東館跡は、気仙沼市最知北最知に所在し、気仙沼湾に面した小高い丘陵上に立地する。

猿喰東館跡は、かつては平場や斜面は畑地や山林として利用されていたが、平成元年、個人住宅建築に伴い発掘調査を実施した。調査区は、主体部北西部の平場にあたる。調査の結果、時代を特定できる遺物は検出されなかったものの、幅 3.2m、深さ 1.6m を測る堀跡が検出された（註1）。

平成 23 年に発生した東日本大震災以降、被災した個人住宅の建築計画が相次ぎ、平成 23 年に東側裾部、24 年度に北西部および中央部近く、平成 25 年度に本丸とされている周辺で確認調査を実施した。そのうち、平成 25 年調査地点においては遺構が検出されたため、本発掘調査を行った（註2）。その結果、堀跡、柵列、門跡などの遺構が検出された。

今回の調査地点は、猿喰東館跡の南端にあたる。調査の結果、段切状遺構、掘立柱建物跡、柵列のほか、多数の土坑および小穴が検出された。また、５基の焼土跡が検出され、炭化物の放射性炭素年代測定（^{14}C年代測定）を行った結果、14 世紀代という結果が得られた（第３章参照）。



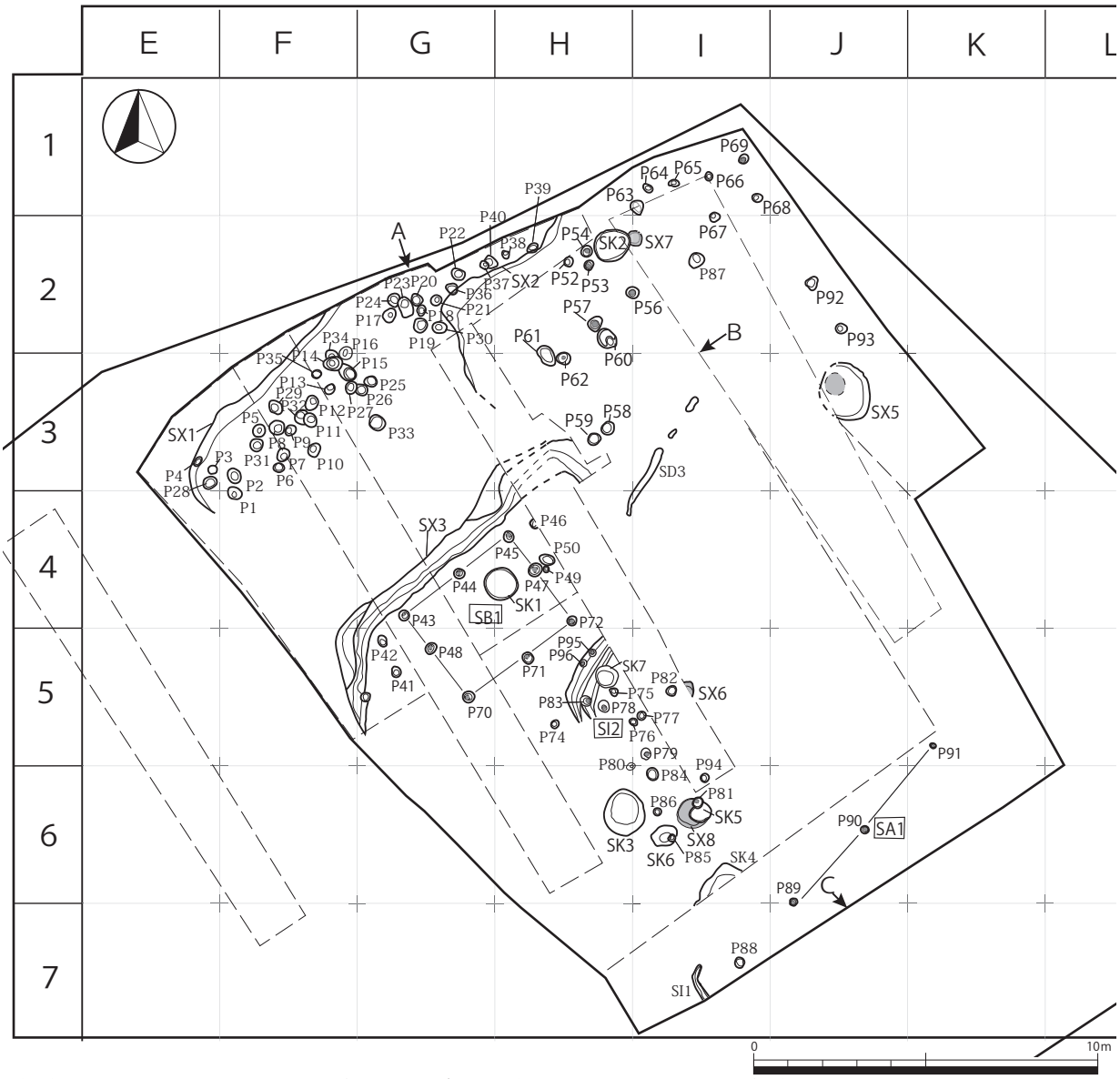
第６図　調査地点位置図（S=1/2,500）

２．基本層序

本調査地における遺構確認面の標高は、おおよそ北側で 6.0m、南側で 2.7m を測り、北から南に向かって傾斜がみられる。また、調査区西側は 15cm ほどの表土直下で地山が確認されていることから、後世の耕作等により削平されている。しかし、南東にいくにしたがって堆積層が厚く、遺存状況が良好であった。

基本層序は、３か所で確認した（第７図内のＡ～Ｃ）。Ⅰ層からⅤ層の５層に分かれる。

Ⅰ層は表土であるが、Ｂ地点では確認されなかった。Ⅲ層は、黒色粘質シルトを基調とし、焼土跡が検出（自然科学分析により 14 世紀～ 15 世紀初め）された。



（矢印Ａ～Ｃは、基本層序確認箇所，遺構番号のゴシック表示は、個別記載を行った遺構）

第７図　猿喰東館跡　遺構配置図（Ｓ＝ 1/200）

基本層序

Ⅰ　にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　　表土

小礫混じり.

Ⅱ　灰黄褐色シルト（10YR4/2）

小礫混じり.

Ⅲ　黒色粘質シルト（10YR2/1）　　14 世紀～ 15 世紀初め

焼土跡検出面

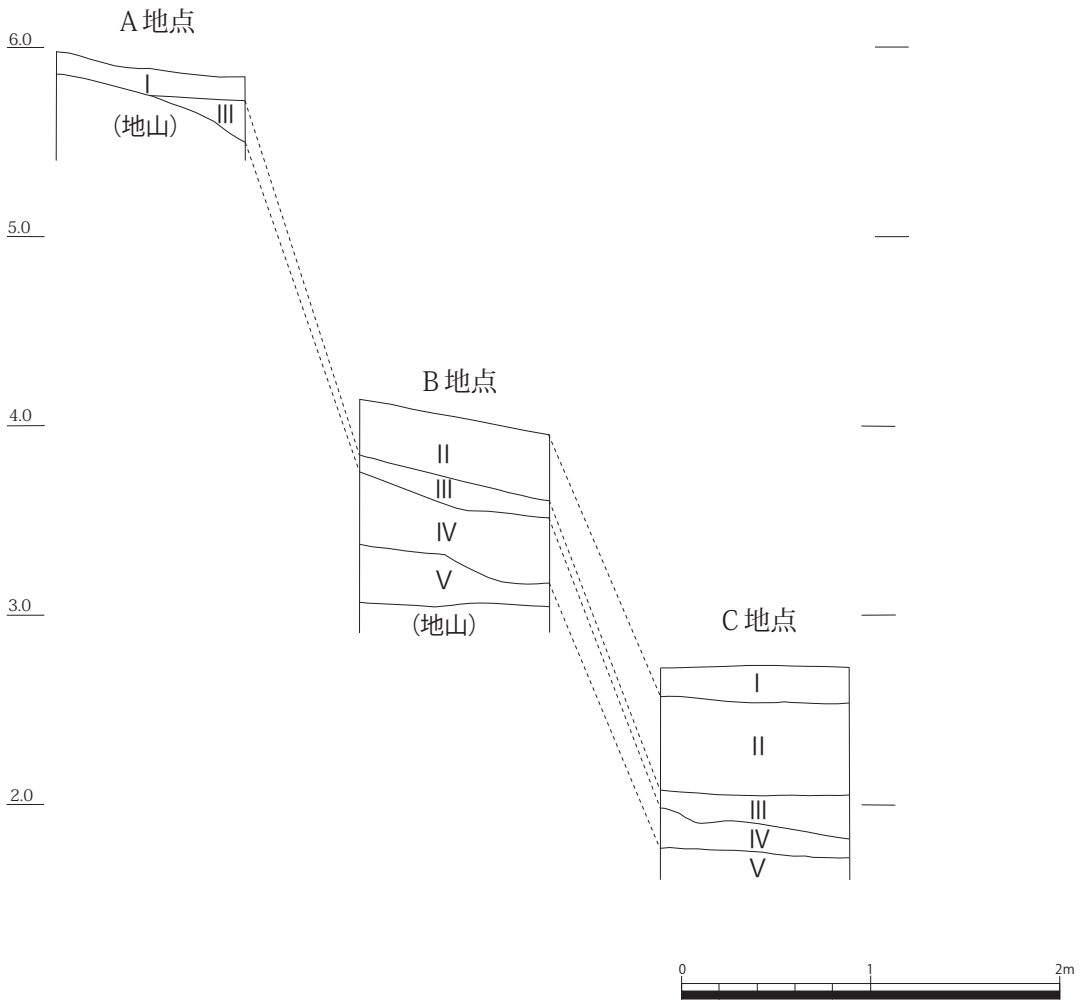
Ⅳ　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）

小礫混じり.

Ⅴ　黒色粘質シルト（10YR2/1）

小礫少量含む.

（地山）風化礫（10YR5/6）



第 8 図　基本層序（S ＝ 1/40）

第２節　検出された遺構と遺物

１．段切状遺構

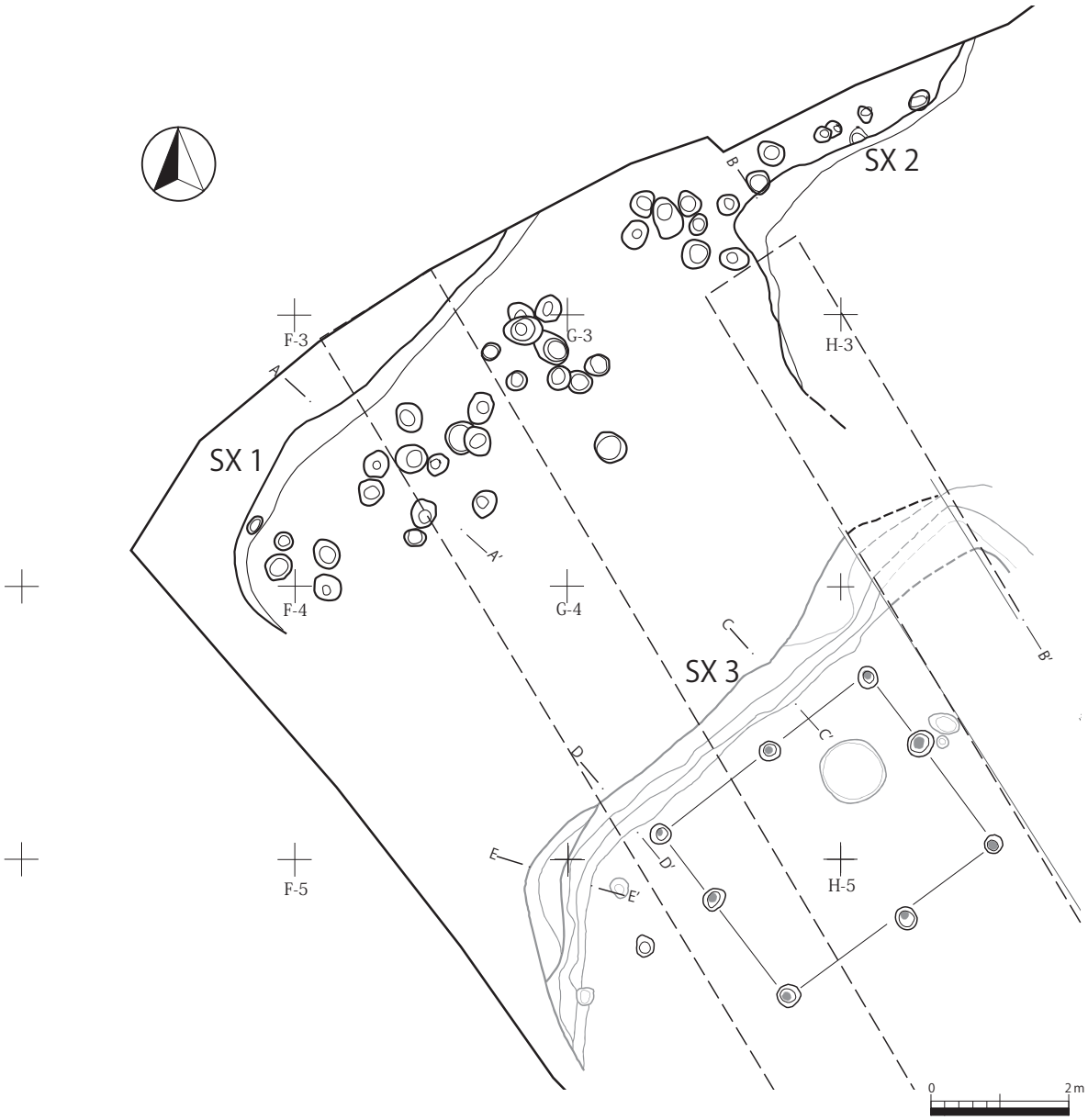
（１）SX１（第９・10 図，写真 1）

【位置・切り合い】

E・F－２～４グリッド周辺に位置し、北側は調査区外に延びる。主軸方向はＮ－43°―E である。確認面の標高は 6.4m を測る。

【形態・規模】

底面の標高は、北西側で 6.2m を測り、南東に向かって緩やかに傾斜する。検出された規模は、最大幅約 2.0m、延長約 7.3 mで、確認面からの深さは約 0.2 mを測る。立ち上がりを確認した範囲で、小穴が 27 基検出された。これらの小穴は、１層直下で最下層の４層を切る状態で検出されたことから、整地



第９図　段切状遺構 平面図　（S＝1/100）

する際に構築されたものと推測できる。また、同様の小穴は、北東側（G・H－２グリッド）においても14基検出されていることから、本遺構は、さらに北東へ６m以上延びているものと推測できる。なお、小穴の形状・規模は一様ではなく、一部の小穴に切り合いもみられ、用途等は推定し得なかった。

【層位】

覆土は、段差が認められた周辺のみで確認され、小穴を除いて３層に分かれる。上層は暗～黒褐色土を基調とし、小穴構築前の堆積である４層は黄褐色土を基調とする。

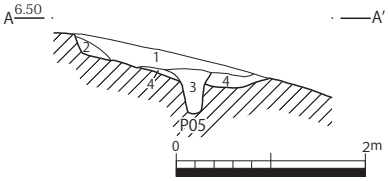
【遺物】

１層で須恵器甕胴部破片２点が検出されたが、細片であり、図示し得なかった。

（2）SX２（第９・11図，写真２）

【位置・切り合い】

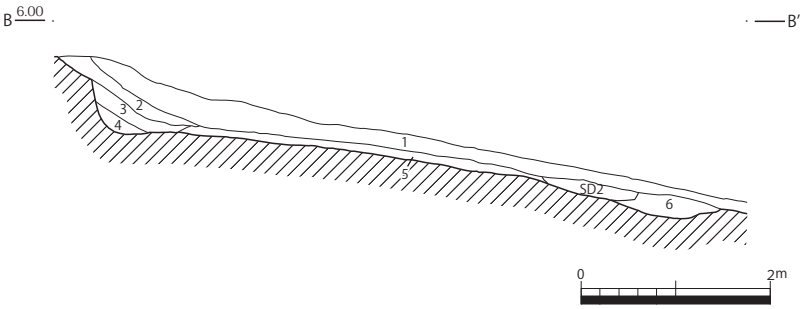
G－２・３およびH－２グリッドに位置し、北側は調査区外に延びる。SX3に切られる。主軸方向はN－30°－Eである。確認面の標高は5.6mを測る。



SX 1 土層説明

1　黒褐色粘質シルト（10YR2/2）
　締まりあり，粘性やや強.
　Φ 2~3cm 礫含む．須恵器２点.
2　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）
　締まりあり，粘性やや強.
　黄褐色土・黒褐色土混入.
　黄橙色岩盤ブロック含む.
3　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　P05 覆土
　締まりあり，粘性あり.
　風化礫粒多量含む.
4　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）
　締まりあり，粘性あり.

第10図　SX1 土層堆積状況図（S＝1/80）



SX 2 土層説明

1　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　遺構外
　小角礫混じり.
2　黒褐色シルト（10YR3/3）　遺構外
　小角礫混じり.
3　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）
　小角礫混じり.
4　褐色粘質シルト（10YR4/6）
5　黄褐色シルト（10YR5/6）
　角礫混じり.
6　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）
　角礫混じり.

第11図　SX2 土層堆積状況図（S＝1/80）

写真１　SX1 土層堆積状況（西から）

写真２　SX2 土層堆積状況（西から）

【形態・規模】

底面の標高は、北西側で 4.8m を測り、南東に向かって緩やかに傾斜する。検出された規模は、最大幅約 4.2 m、延長は約 7m で，確認面からの深さは約 0.8 mを測る。SX1 の南東でほぼ平行するかたちで検出されたが、SX1 でみられた小穴群は確認できなかった。

【層位】

覆土は３層に分かれる。黄褐色～褐色の粘質シルトを基調とする。

【遺物】

遺物は検出されなかった。

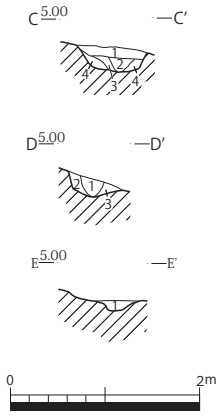
（3）SX３（第９・12 図，写真３～５）

【位置・切り合い】

F・G－４・５、G・H－３、H－４グリッドに位置し、SX1 の南約 7m を平行する。SX2 を切る。主軸方向は N － 40°―E である。確認面の標高は 4.76m を測る。

【形態・規模】

段切り直下に溝（SD2）が廻る。鎹状を呈し、南西端部は収束する。溝の底面の標高は、東側が 4.10 m、西側が 4.50 mと、西から東に向かって傾斜がみられる。規模は、最大幅約 1.12 m、延長約 12 mで、



SX ３（SD2）土層説明

C － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）
　　締まりあり，粘性やや強．黄橙色岩盤ブロック含む．
C － 2　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）
　　締まりやや強，粘性あり．黄褐色土・黒褐色土混入．黄橙色岩盤ブロック含む．
C － 3　褐色粘質シルト（10YR4/6）
　　締まりあり，粘性あり．黒褐色土混入．
C － 4　黄褐色粘質シルト（10YR5/6）
　　締まりあり，粘性あり．黒褐色少量混入．
D － 1　浅黄褐色シルト（10YR8/3）
　　締まり弱，粘性なし．暗褐色土混入．灰白色岩盤ブロック含む．
D － 2　褐色粘質シルト（10YR4/4）
　　締まり弱，粘性やや強．灰白色岩盤ブロック含む．
D － 3　褐色粘質シルト（10YR4/6）
　　締まりあり，粘性あり．灰白色岩盤ブロック多量含む．
E － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）
　　締まりやや強，粘性やや強．黄橙色岩盤ブロック多量含む．

第 12 図　SX3 土層堆積状況図（S ＝ 1/80）

写真３　SD2 土層堆積状況 C（西から）

写真４　SD2 土層堆積状況 D（西から）

確認面からの深さは約 0.29 mを測る。

なお、本遺構の南東側に平行して掘立柱建物跡（SB1）が検出された。本遺構がSB1 を囲むように廻っていることから、建物跡に伴う造成であると推測できる。

【層位】

層位は、３か所に設定したベルトおよびSX2 の断面で確認した。SX3 の覆土は２層に分かれる。SX3 覆土上面から溝を掘り込んでいることから、整地後に溝を掘り込んだものと推測できる。

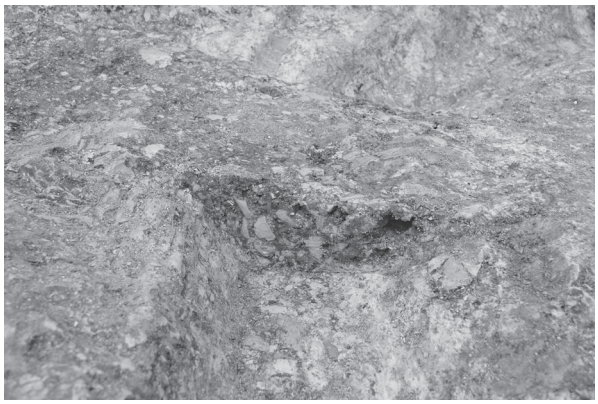


写真５　SD2 土層堆積状況 E（南から）

溝の覆土は、Ａベルトが４層、Ｂベルトが３層に分かれ、Ｃベルトは単一層であった。それぞれのベルトにおける層位は対応しないため、自然堆積とは考え難い。

【遺物】

遺物は検出されなかった。

2. 掘立柱建物跡

SB１（第 13 ～ 15 図，第１表，写真６～ 16）

【位置・切り合い】

G・H － 4・5 グリッドに位置する。主軸方向はＮ － 39°―E である。確認面の標高は 4.55m を測る。

なお、本遺構は、P43・44・45 が確認調査で検出され、報告書 (註3) ではSA1 と報告しているが、本発掘調査で掘立柱建物跡であることが明らかになったため、P43 ～ P45 も含めて SB1 として扱うこととした。

【形態・規模】

柱穴９本（P43・44・45・41・48・47・70・71・72）から成る２間×２間の南北棟である。P41 は、柱痕跡を確認できなかったが、その配置・規模等から、棟持柱の可能性もあることから、本遺構に帰属するものとして扱うこととした。

各柱穴は、直径 28cm ～ 42cm を測る。平面形は円形あるいは楕円形を呈し、確認面からの深さは、南東列が 6cm ～ 20cm ほどで浅いが、ほかは 36cm ～ 59cm を測る。また、底面の標高は、P72 が 3.8m と若干高いが、ほかはおおよそ 4.0 m前後である。

柱間は、西列（P43・44・45）と中央（P47・48）間が 1.2m、中央と東列（P70・71・72）間が 1.8m、また、北列（P45・47・72）と中央（P44・71）間が 1.8m、中央と南列（P43・48・70）間が 2.0m である。

第１表　SB1　柱穴一覧

番号	平面形	規模〔cm〕			柱痕跡	備考
		長径	短径	深さ		
P45	亜円形	31	28	43	有	
P44	亜円形	31	28	32	有	
P43	亜円形	30	29	41	有	
P47	楕円形	42	36	42	有	
P48	亜円形	34	30	40	有	
P72	円形	28	28	14	有	
P71	亜円形	35	32	5	有	
P70	円形	32	32	22	有	須恵器出土
P41	楕円形	32	25	46		刀子出土

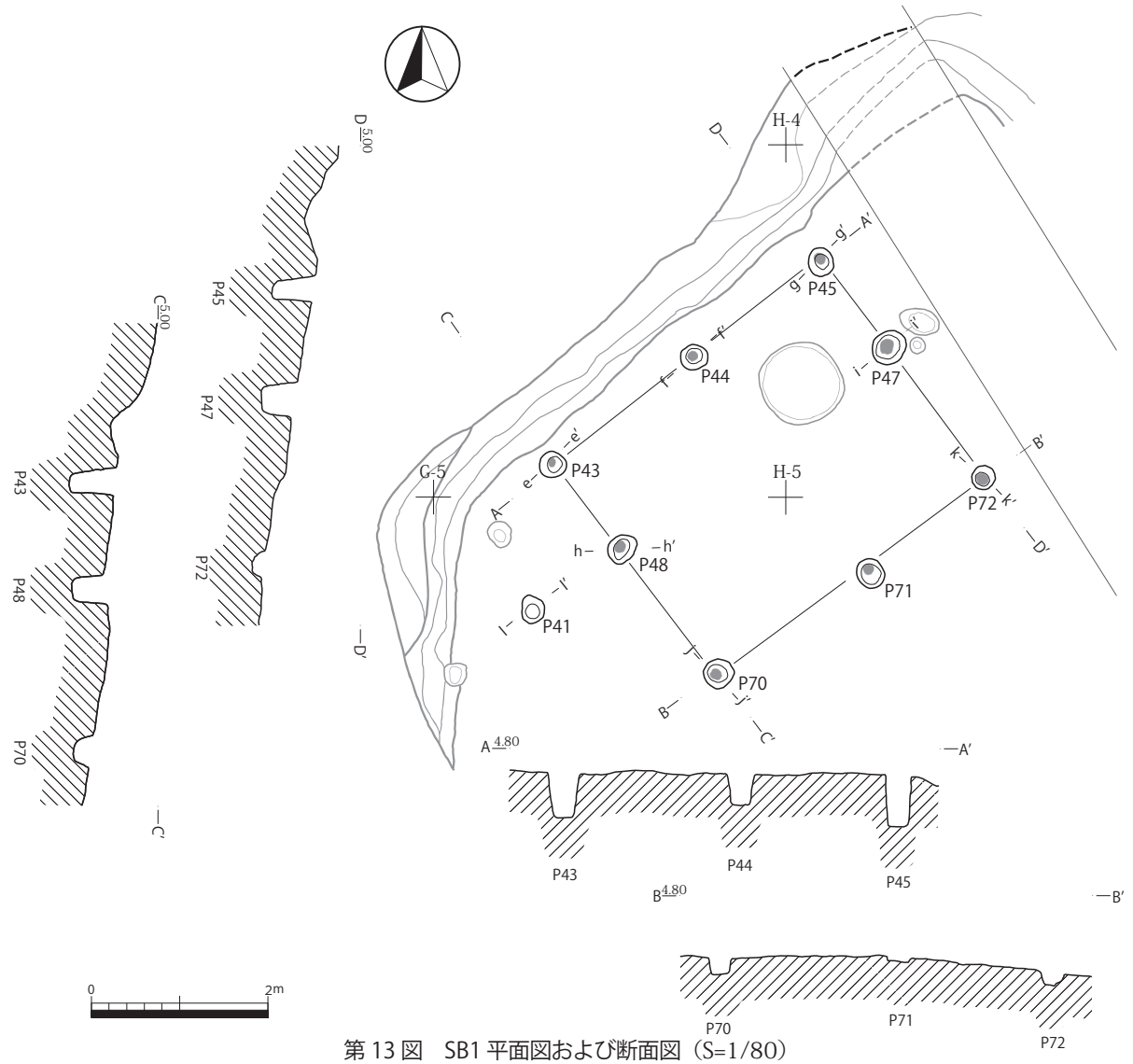
【層位】

P41 は黄褐色土を基調とする単一層であったが、ほかは２あるいは３層に分かれる。柱痕跡は暗褐色あるいは黄褐色、掘方は黄橙色あるいは黄褐色土を基調と

する。

【遺物】

遺物は、２点検出された。１は、P70 で検出された無釉焼き締め陶器で、甕の胴部である。２は、P41 で検出された鉄製品で、刀子である。茎の端部が欠損している。なお、２は確認調査で検出されたもので、確認調査の報告書で報告したものである（註3）。



第 13 図　SB1 平面図および断面図（S=1/80）

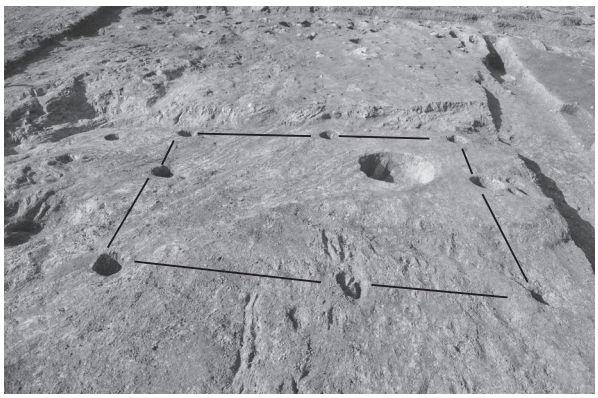
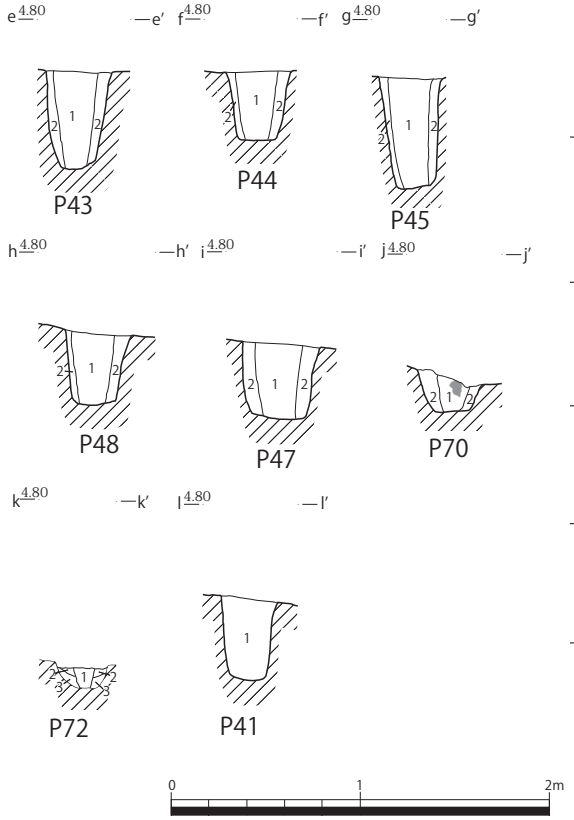


写真６　SB1 全景（南東から）

写真７　SB1 全景（南西から）



ＳＢ１ 土層説明

P43 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）　《柱痕跡》
　締まり弱，粘性あり．灰白色地山粒微量含む．
P43 － 2　にぶい黄橙色粘質シルト（10YR7/4）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強．灰白色地山粒少量含む．

P44 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）　《柱痕跡》
　締まり弱，粘性あり．灰白色地山粒微量含む．
P44 － 2　にぶい黄橙色粘質シルト（10YR7/4）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強．灰白色地山粒混じる．
　Φ 3cm 小礫含む．

P45 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性あり．灰白色地山粒多量含む．
P45 － 2　にぶい褐色粘質シルト（10YR7/4）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強．灰白色地山粒混じる．

P48 － 1　黄褐色粘質シルト（10YR5/6）　《柱痕跡》
　締まり弱，粘性あり．灰白色地山粒微量含む．
P48 － 2　明黄褐色粘質シルト（10YR7/6）《掘方》
　締まりあり，粘性あり．黄褐色粒多量含む．

P47 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性やや強．灰白色地山粒多量含む．
P47 － 2　にぶい黄橙色粘質シルト（10YR7/4）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強．灰白色地山粒多量含む．

P70 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性あり．灰白色地山粒含む．
P70 － 2　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強．灰白色地山粒多量含む．

P72 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性あり．灰白色地山粒含む．
P72 － 2　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性あり．灰白色地山粒多量含む．
P72 － 3　明黄褐色シルト（10YR7/6）　《掘方》
　締まりあり，粘性なし．灰白色地山粒・黄褐色粒多量含む．

P41 － 1　黄褐色粘質シルト（10YR5/6）
　締まり弱，粘性なし．灰白色地山粒微量含む．

第 14 図　SB1 柱穴土層堆積状況図（S=1/40）

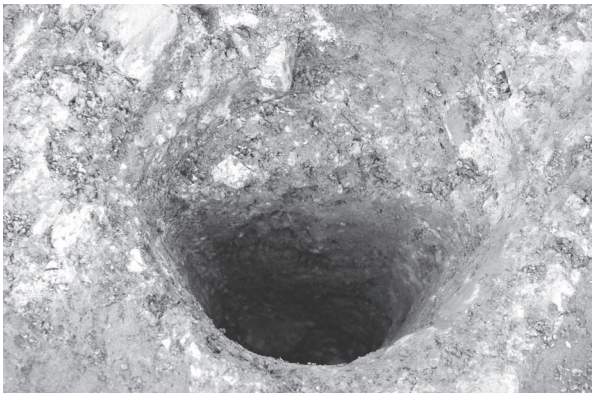


写真 8　P43 土層堆積状況（南から）

写真 9　P44 土層堆積状況（南から）

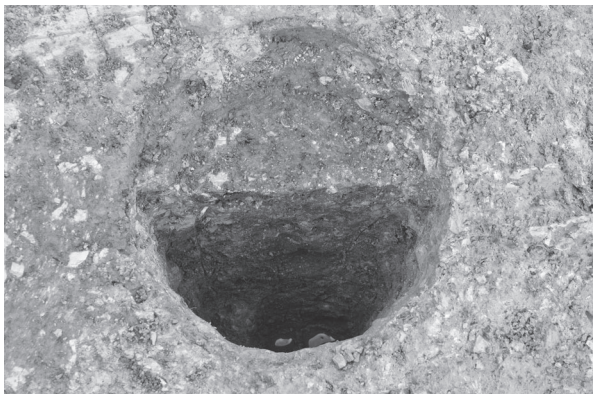


写真 10　P45 土層堆積状況（南から）

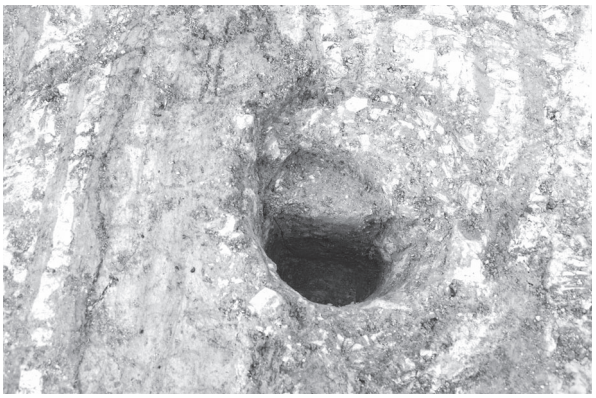


写真 11　P48 土層堆積状況（南から）

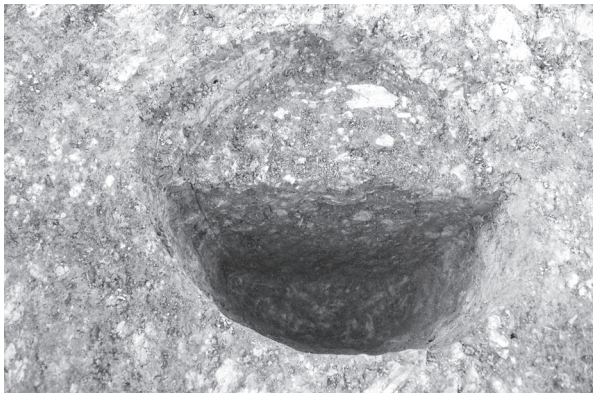


写真 12　P47 土層堆積状況（南から）

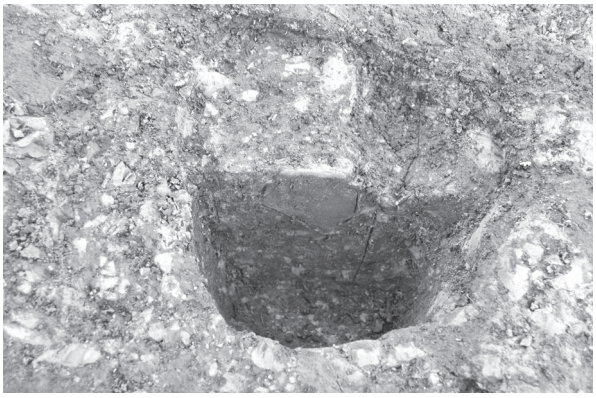


写真 13　P70 土層堆積状況（西から）

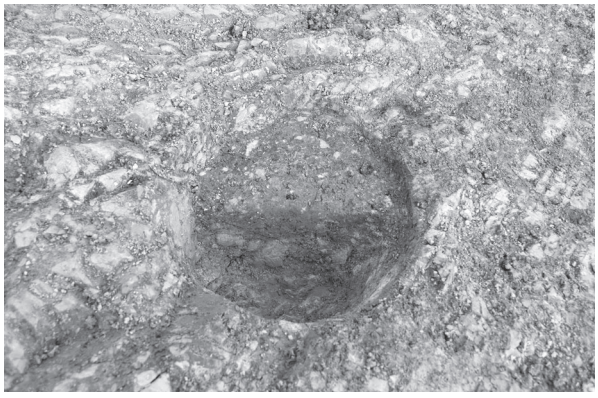


写真 14　P72 土層堆積状況（西から）

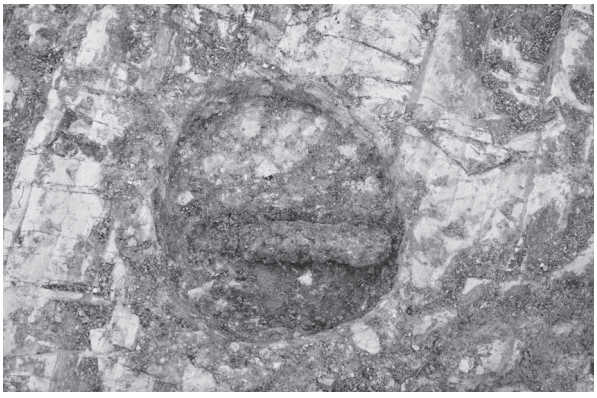
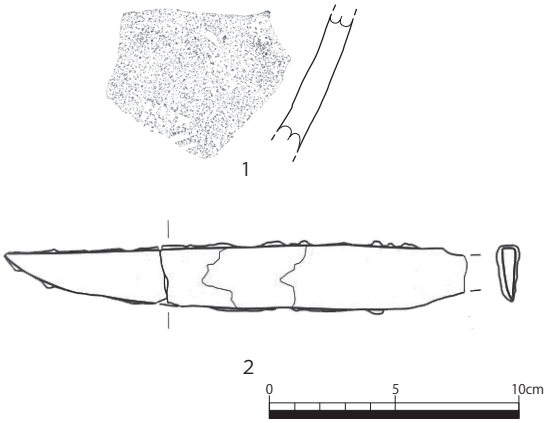


写真 15　P41 遺物出土状況（南から）



第 15 図　SB1 出土遺物（S=1/3）

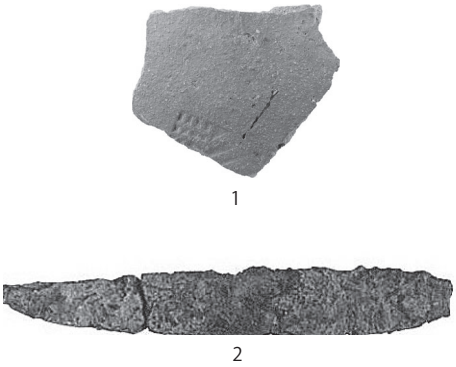


写真 16　SB1 出土遺物

3. 柵列

SA１（第 16・17 図，第２表，写真 17 ～ 19）

【位置・切り合い】

K － 5､J･K － 6 グリッドに位置する。主軸方向は N － 48°―E である。確認面の標高は 1.82m を測る。

【形態・規模】

柱穴３本（P89・90・91）がほぼ直線上に並ぶ。その間隔は、P89・90 間が 3.0m、90・91 間が 3.1 mを測る。

各柱穴は、直径おおよそ 18cm ～ 24cm を測るほぼ円形を呈し、確認面からの深さは、10cm ～ 12cm ほどである。

なお、本遺構の南西方向直線上に柱痕跡を有する小穴１基（P88）が検出された。本遺構の延長の可能性も考えられるが、P89 との間隔が 2.4m であり、本遺構で確認された間隔と比し、狭い。また、P88 周辺で竪穴建物跡の壁溝の一部の可能性が考えられる溝が確認された。そのため、本遺構とは別のものと考えた。

【層位】

いずれの柱穴も柱痕跡（１層）および掘方（２層）に分かれる。柱痕跡は、焼土・炭化物を含む黒褐色粘質シルト、掘方が暗褐色粘質シルトを基調とする。

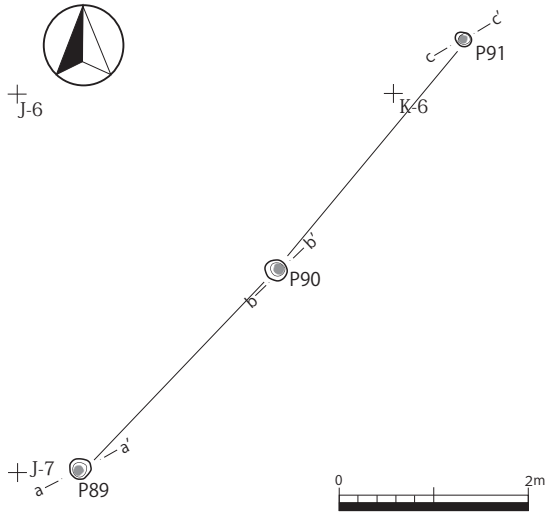
【遺物】

遺物は検出されなかった。

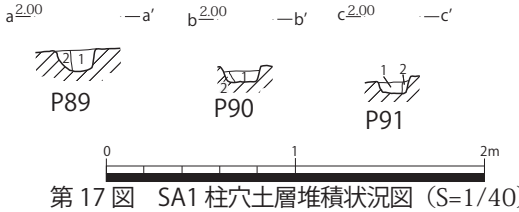
第２表　SA1　柱穴一覧

番号	平面形	規模〔cm〕			柱痕跡	備考
		長径	短径	深さ		
P89	亜円形	23	21	12	有	
P90	亜円形	24	21	10	有	
P91	亜円形	18	16	10	有	

写真 17　SA1 全景（西から）



第 16 図　SA1 平面図（S=1/80）



第 17 図　SA1 柱穴土層堆積状況図（S=1/40）

SA1　土層説明

1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　締まりあり，粘性あり．焼土粒・炭化物含む．

2　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《掘方》
　地山粒多量含む．

写真 18　P89 土層堆積状況（南から）

写真 19　P90 土層堆積状況（北から）

4. 焼土跡

（１）SX 5（第 18 図，写真 20）

【位置・切り合い】

Ｊ－３グリッドに位置し、検出面は基本層序Ⅲ層（黒色粘質シルト層）上面である。確認面の標高は 3.38 mを測る。

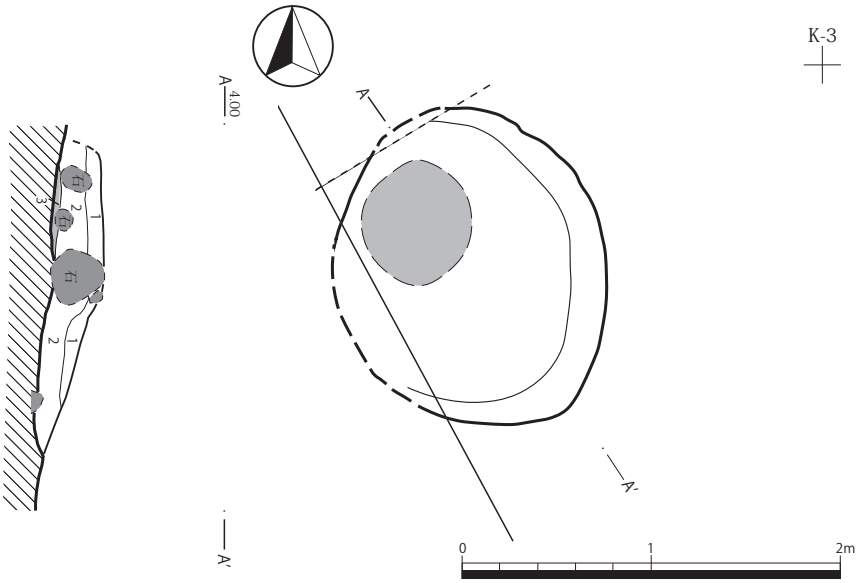
【形態・規模】

平面形はやや不整な楕円形を呈する。規模は長径約 1.7 m、短径約 1.2 mで、確認面からの深さは約 0.30 mを測る。

底面に 60cm ほどの円形状に焼土面が確認された。また、焼土面の南側はやや高くなっており、壁は緩やかに立ち上がる。

【層位】

覆土は上層（１層）と下層（２層）の２層に分かれる。上層は黒褐色粘質シルト、下層は暗褐色粘質シルトを基調とするが、いずれの層においても被熱した小礫および炭化物を含み、これらは下層に集中



SX5　土層説明
1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）
　締まりやや強，粘性やや強.
　被熱小礫・炭化物少量含む.
2　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）
　締まりやや強，粘性やや強.
　被熱小礫・炭化物多量含む.
　製塩土器含む.
3　焼土面

第 18 図　SX5 平面図および土層堆積状況図（S=1/40）

して認められた。なお、下層で検出された炭化物について、放射性炭素（^{14}C）による年代測定を行った（第３章参照）。

【遺物】

遺物は、細片で図示し得なかったが、下層で土師質土器（製塩土器）が３点検出された。

写真 20　SX5 土層堆積状況（西から）

(2) SX6（第 19 図，写真 21・22）

【位置・切り合い】

Ｉ－５グリッドに位置し、検出面は基本層序Ⅲ層（黒色粘質シルト層）上面である。確認面の標高は 3.32 mを測る。

【形態・規模】

本遺構は、西側を確認調査時に掘削した３トレンチで削平してしまったため、北東部を確認したのみである。そのため、形状は明らかにし得なかったが、おおよそ円形あるいは楕円形を呈するものと推測できる。残存する規模は、南北 0.48 m、東西 0.12 mで、確認面からの深さは 0.06 mを測る。底面は水平かつ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【層位】

覆土は単一層で、確認した全面がにぶい赤褐色シルトを基調とする焼面がみられるが、強い焼き締まりは認められなかった。

【遺物】

遺物は、底面で土師質土器（製塩土器）が２点検出された。細片であるため、図示はし得なかった（写真 22）。

写真 22　SX6 出土遺物（S=1/1）

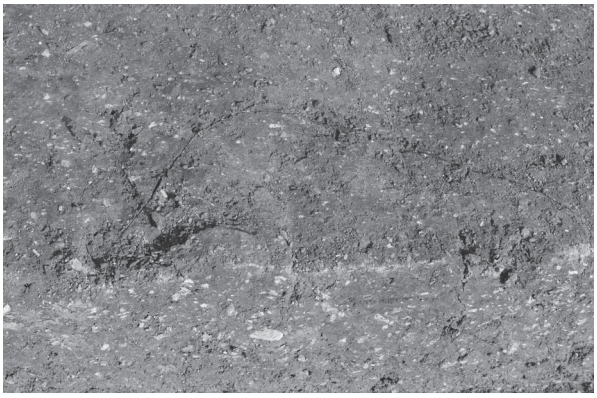
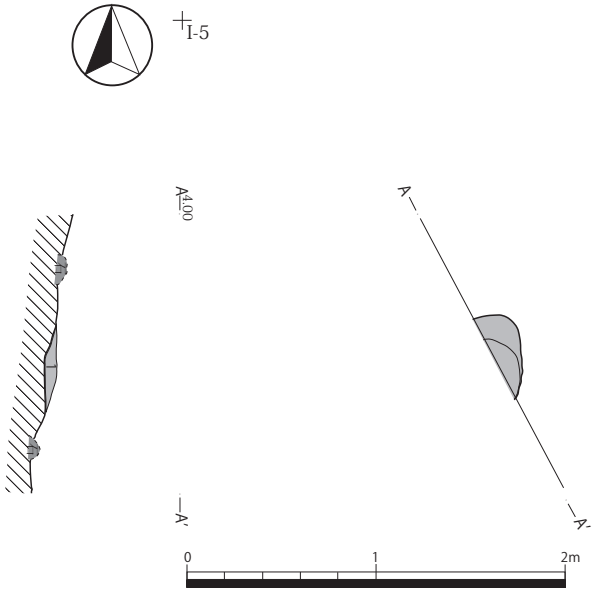


写真 21　SX6 遺構検出状況（西から）

SX6　土層説明

1　にぶい赤褐色シルト（2.5YR4/3）
　　締まりあり，粘性やや強．炭化物少量含む．

2　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）《底面》
　　締まりやや強，粘性やや強．
　　被熱小礫・炭化物多量含む．
　　製塩土器片含む．



第 19 図　SX6 平面図および土層堆積状況図（S=!/40）

（3）SX7（第 20 図，写真 23）

【位置・切り合い】

H・I－２グリッドに位置し、検出面は基本層序Ⅲ層（黒褐色粘質シルト）である。西側を SK2 に切られる。確認面の標高は 4.77 mを測る。

【形態・規模】

一部切り合い等により確認し得なかったが、平面形はほぼ円形を呈するものと推測できる。残存する規模は、南北約 0.92 m、東西約 0.78 mで、確認面からの深さは約 0.16 mを測る。底面はほぼ平坦であるが、北から南に向かって傾斜がみられ、壁はやや緩やかに立ち上がる。

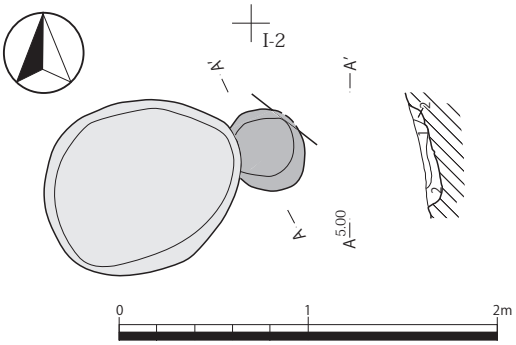
【層位】

覆土は２層に分かれる。１層はにぶい赤褐色シルト、２層は黒褐色粘質シルトを基調とするが、ほぼ全面で焼土が検出された。しかし、強い焼き締まりは認められなかった。

【遺物】

遺物は、検出されなかった。

写真 23　SX7 遺構検出状況（西から）



SX7　土層説明
1　にぶい赤褐色シルト（2.5YR4/3）
　　締まりあり，粘性やや強.
2　黒褐色粘質シルト（7.5YR3/2）
　　締まりあり，粘性やや強．焼土粒含む.

第 20 図　SX7 平面図および土層堆積状況図（S=1/40）

（4）SX8（第 21 図，写真 24・25）

【位置・切り合い】

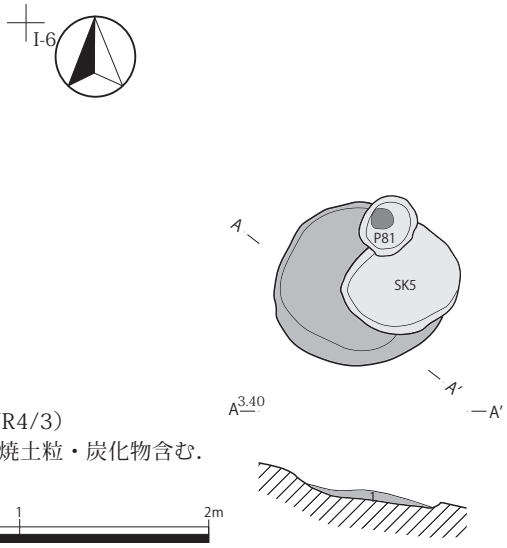
I－６グリッドに位置する。東側を SK5 および P85 に切られる。確認面の標高は 3.20 mを測る。

【形態・規模】

東側は切り合いにより明らかにし得なかったが、残存部より、平面形はほぼ円形を呈し、規模は長径 0.9 m、短径 0.85 mを測るものと推測できる。確認面からの深さは約0.05 mを測る。底面はほぼ平坦であるが、若干凹凸がみられ、壁はやや緩やかに立ち上がり、断面は浅い皿状を呈する。

【層位】

覆土は単一層で、にぶい赤



SX8　土層説明
1　にぶい赤褐色シルト（2.5YR4/3）
　　締まりあり，粘性あり．焼土粒・炭化物含む.

第 21 図　SX8 平面図および土層堆積状況図（S=!/40）

写真 24　SX8 遺構検出状況（西から）

写真 25　SX8 完掘状況（南から）

褐色シルトを基調とする。ほぼ全面に焼土粒および炭化物を含み、その最下面で焼面が確認された。

【遺物】

遺物は、検出されなかった。

5．土坑

（1）SK1（第 22 図，写真 26・27）

【位置・切り合い】

G・H－４グリッドに位置する。SB1 と重複がみられるが、新旧関係は不明である。確認面の標高は 4.45 mを測る。

【形態・規模】

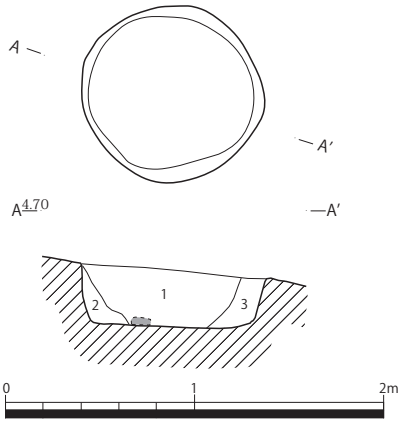
平面形はほぼ円形を呈する。規模は長径約 0.98 m、短径約 0.96 mで、確認面からの深さは約 0.32 mを測る。底面はほぼ水平かつ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

【層位】

覆土は３層に分かれる。黄褐色～褐色粘質シルトを基調とする。

【遺物】

遺物は、検出されなかった。



SK1　土層説明

1　明黄褐色粘質シルト（10YR6/6）
　　締まりあり，粘性やや強．灰白色岩盤ブロック少量含む．

2　褐色粘質シルト（10YR4/4）
　　締まりやや強，粘性あり．地山粒多量含む．

3　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/4）
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．

第 22 図　SK1 平面図および土層堆積状況図
（S=1/40）

写真 26　SK1 土層堆積状況（南から）

写真 27　SK1 完掘状況（東から）

（2）SK2（第 23 図，写真 28）

【位置・切り合い】

Ｈ－２グリッドに位置し、検出面は基本層序Ⅲ層（黒褐色粘質シルト）である。SX7（焼土跡）を切る。確認面の標高は 4.96 m を測る。

【形態・規模】

平面形は楕円形を呈する。規模は長径約 1.08 m、短径約 0.92 mで、確認面からの深さは約 0.44 mを測る。底面はほぼ平坦であるが、西側から東側に向かって若干傾斜がみられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

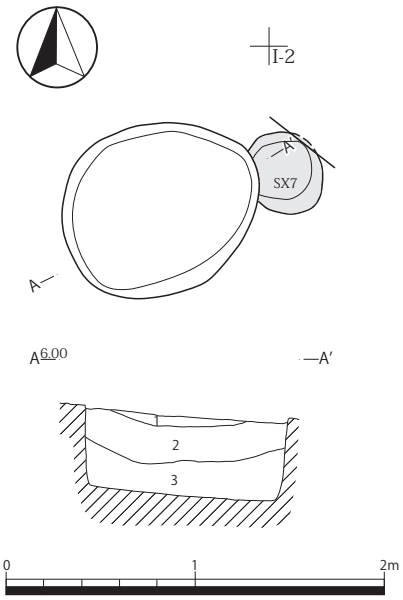
【層位】

覆土は３層に分かれ、自然堆積の様相を呈する。

【遺物】

遺物は、検出されなかった。

写真 28　SK2 土層堆積状況（南から）



SK2　土層説明

1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）
　　締まりやや強，粘性あり．焼土粒・炭化物含む．

2　褐色粘質シルト（10YR4/4）
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．

3　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/4）
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．

第 23 図　SK2 平面図および土層堆積状況図（S=1/40）

（3）SK3（第 24 図，写真 29・30）

【位置・切り合い】

Ｈ・Ｉ－６グリッドに位置する。確認面の標高は 3.38 mを測る。

写真 29　SK3 土層堆積状況（西から）

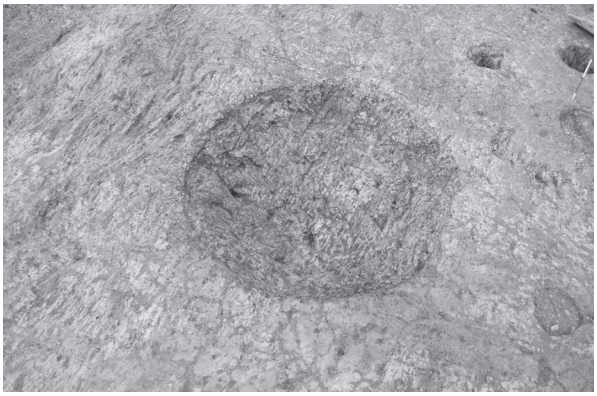
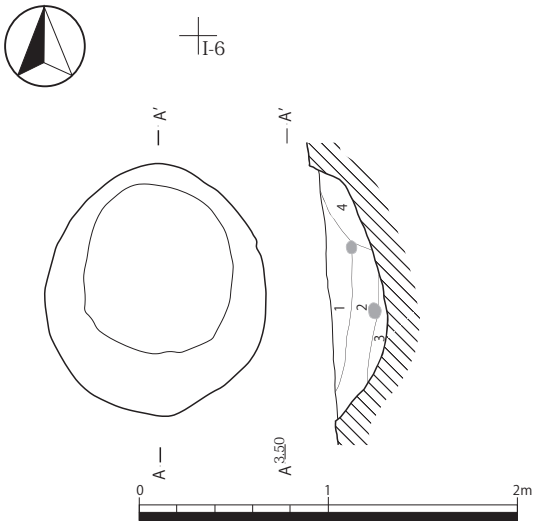


写真 30　SK3 完掘状況（南から）



SK3　土層説明
1　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）
　　締まりやや強，粘性あり．炭化物含む．
2　褐色粘質シルト（10YR3/4）
　　締まりやや強，粘性あり．被熱小礫・焼土粒含む．
3　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/4）
　　締まり弱，粘性あり．Φ 10cm 円礫含む．
4　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/4）
　　締まりあり，粘性あり．
　　灰白色岩盤ブロック多量含む．

第 24 図　SK3 平面図および土層堆積状況図（S=1/40）

【形態・規模】

平面形は楕円形を呈する。規模は長径約 1.32 m、短径約 1.18 mで、確認面からの深さは約 0.32 m を測る。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。

【層位】

覆土は 4 層に分かれ、ほぼ自然堆積の様相を呈する。上層は暗褐色粘質シルト、壁際から下層はにぶい黄褐色粘質シルトを基調とする。

【遺物】

遺物は、検出されなかった。

（4）SK6（第 25 図，写真 31・32）

【位置・切り合い】

Ｉ－６グリッドに位置する。P85 に切られる。確認面の標高は 3.13 mを測る。

【形態・規模】

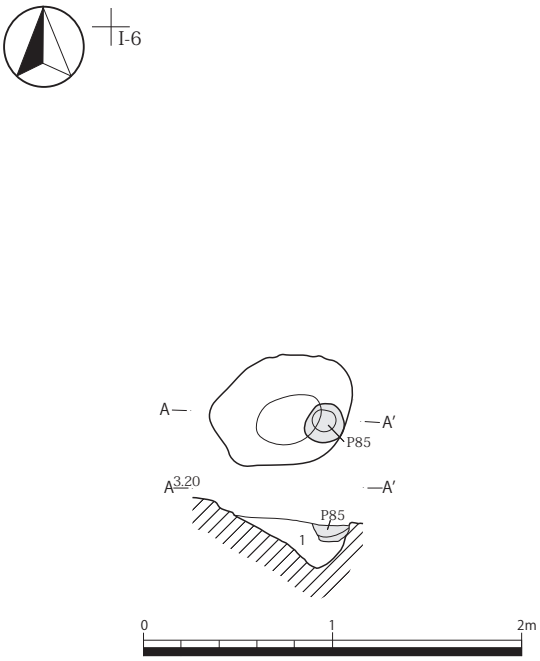
平面形は楕円形を呈する。規模は長径約 0.75 m、短径約 0.60 mで、確認面からの深さは約 0.24 m を測る。底面は丸みを帯び、壁は西側では緩やかであるが、東側ではやや急に立ち上がる。

【層位】

覆土は単一層で、にぶい黄褐色粘質シルトを基調とする。

【遺物】

遺物は、検出されなかった。



SK6　土層説明
1　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）
　　締まりやや強，粘性あり．
　　炭化物・灰白色岩盤ブロック含む．

第 25 図　SK6 平面図および土層堆積状況図
（S=1/40）

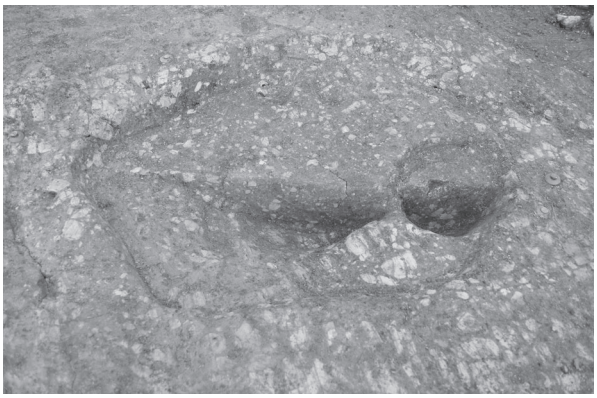


写真 31　SK6 土層堆積状況（西から）

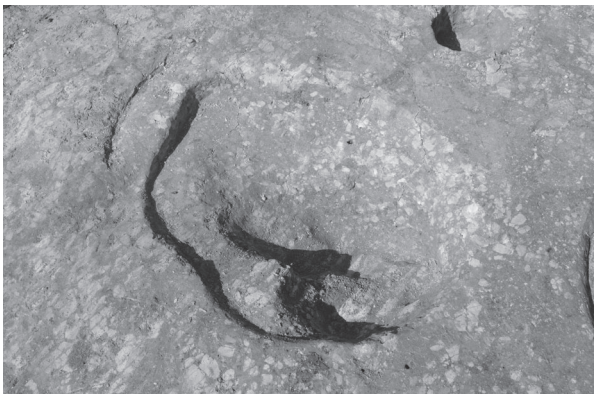


写真 32　SK6 完掘状況（南から）

6. 竪穴建物跡

SI2（第 26 ～ 28 図，第 3 表，写真 33 ～ 41）

【位置・切り合い】

H・I－５グリッドに位置する。主軸方向は不明である。確認面の標高は 3.85 mを測る。

【形態・規模】

遺存状況が悪く、壁溝の北から西にかけての箇所が検出されたのみで、床面等は確認できなかった。また、残存部からは平面形および規模は明らかにし得なかったが、柱穴の位置から、4.5 m前後になるものと推測することができる。

《付帯施設》

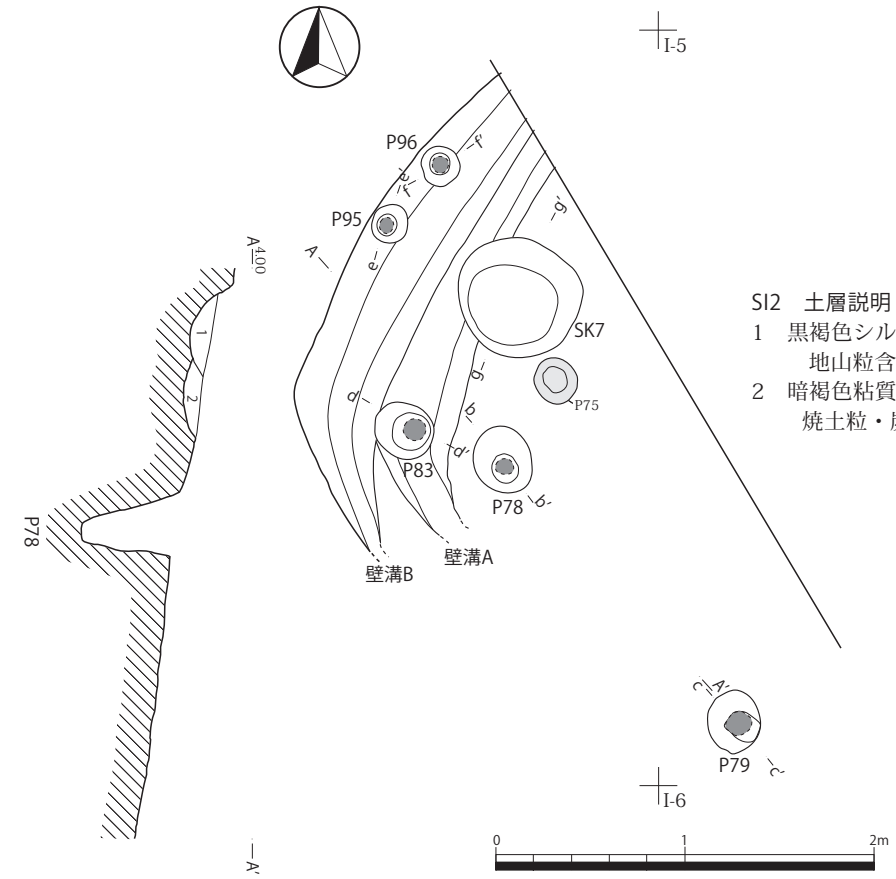
壁溝・柱穴・貯蔵穴と推測できる土坑が検出された。

壁溝は、２条が切り合って検出された。最大幅は約 0.45 m、確認面からの深さは約 0.12 mを測る。２条の溝は形状、幅、深さ等類似しており、住居の拡張の可能性も想定できる。

柱穴は、５本（P78・79・83・95・96）が本遺構に帰属するものと判断した。そのうち、位置・規模からみて､P78 および P79 が主柱穴であると推測できる。なお、本遺構の北東側は確認調査の際にトレンチ（３

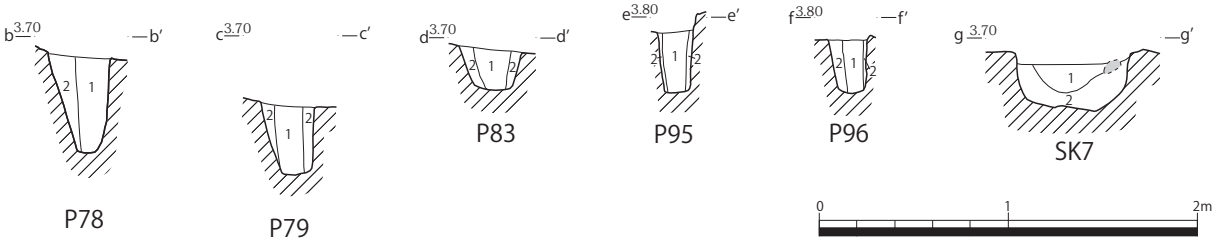
第 3 表　SI2 柱穴一覧

番号	平面形	規模〔cm〕			柱痕跡	備考
		長径	短径	深さ		
P78	楕円形	40	33	48	有	
P79	亜円形	30	27	40	有	
P83	亜円形	32	30	26	有	
P95	楕円形	22	20	30	有	
P96	亜円形	22	20	34	有	



SI2　土層説明
1　黒褐色シルト（10YR3/2）　《壁溝 B》
　地山粒含む.
2　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）《壁溝 A》
　焼土粒・炭化物含む.

第 26 図　SI2 平面図及び土層堆積状況図（S=1/40）



SI2《付帯施設》土層説明

P78 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性あり.
　炭化物・灰白色岩盤ブロック含む.
P78 － 2　にぶい黄橙色粘質シルト（10YR5/4）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強.
　灰白色岩盤地山粒少量含む.

P79 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性やや強．炭化物含む.
P79 － 2　にぶい赤橙色粘質シルト（2.5YR4/3）《掘方》
　締まりあり，粘性やや強．風化礫多量含む.

P83 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　締まりあり，粘性やや強．炭化物・地山粒含む.
P83 － 2　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《掘方》
　締まりやや強，粘性やや強．炭化物含む.

P95 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　締まり弱，粘性あり．被熱小礫・炭化物含む.
P95 － 2　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/4）《掘方》
　灰白色岩盤ブロック多量含む.

P96 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　締まりやや強，粘性あり.
　被熱小礫・炭化物含む.
P96 － 2　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）　《掘方》
　締まりあり，粘性あり.
　灰白色岩盤ブロック多量含む.

SK7 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）
　締まりやや強，粘性あり．炭化物・地山粒含む.
SK7 － 2　にぶい暗褐色粘質シルト（10YR4/3）
　締まりやや強，粘性あり.
　灰白色岩盤ブロック多量含む.

第 27 図　SI2 付帯施設土層堆積状況図（S=1/40）

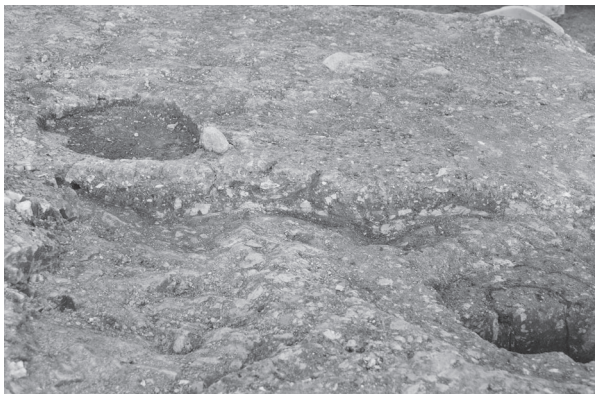


写真 33　SI2 土層堆積状況（西から）

写真 34　SI2 完掘状況（南から）

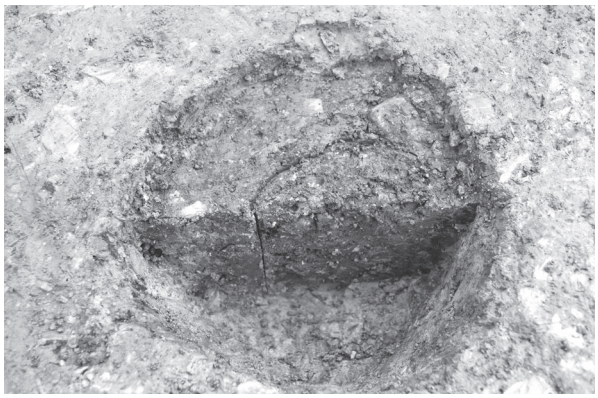


写真 35　P78 土層堆積状況（北から）

写真 36　P79 土層堆積状況（西から）

写真 37　P95 土層堆積状況（南東から）

写真 38　P96 土層堆積状況（南東から）

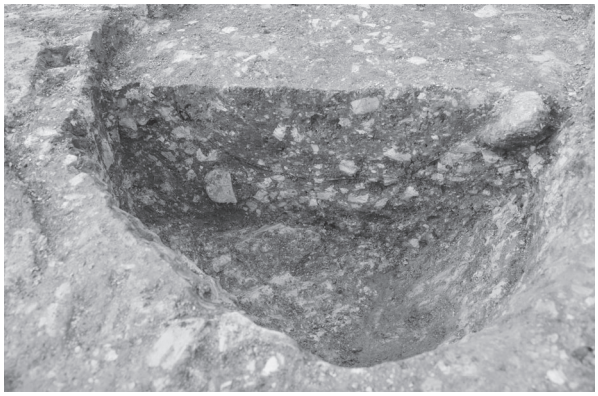


写真 39　SK7 土層堆積状況（西から）

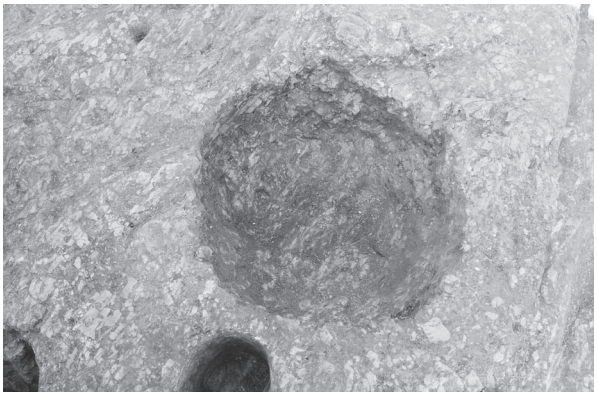
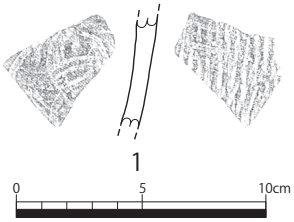


写真 40　SK7 完掘状況（東から）

トレンチ）で掘削してしまったため、東側の柱穴は確認できなかった。P95・P96 は、規模が小さく、壁溝上で検出されたことから、支柱穴と推測できる。また、P83 は、壁溝Ａ（旧溝）上で検出されており、拡張後の主柱穴である可能性も考えられる。



第 28 図　SI2 出土遺物
（S=1/3）

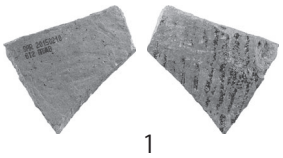


写真 41　SI2 出土遺物

SK7 は旧壁溝を切って検出された。長径 0.68 m、短径 0.62 mの楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.30 mを測る。遺物は検出されなかったが、貯蔵穴と判断した。

【層位】

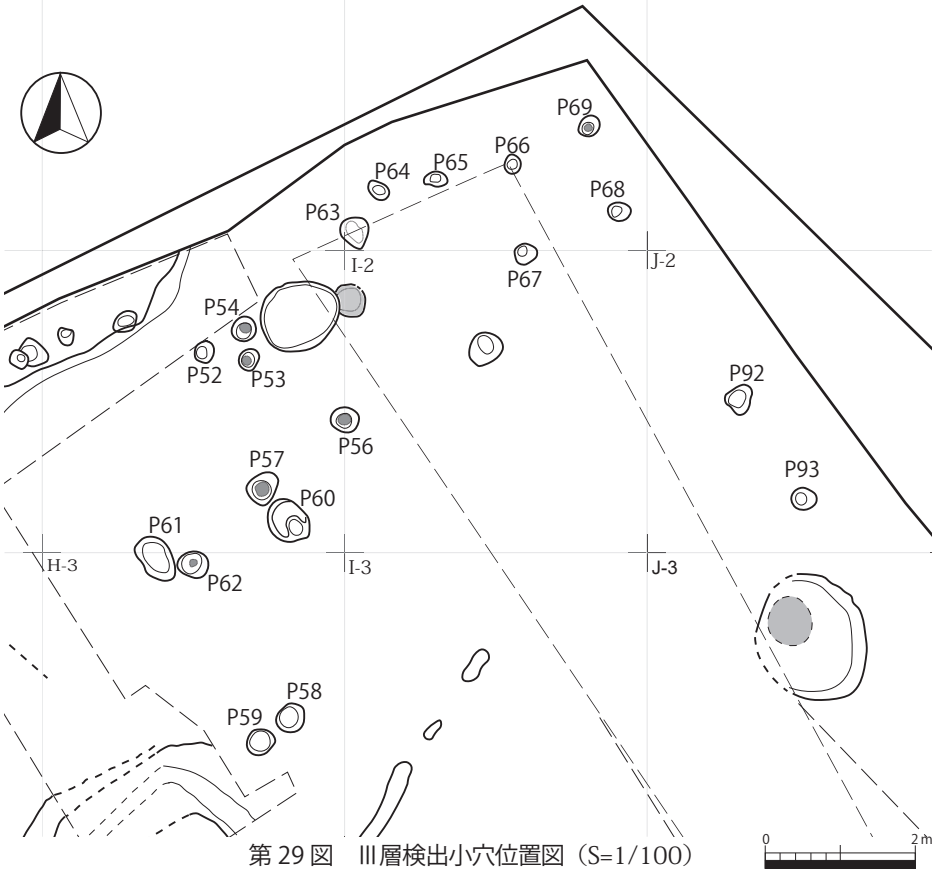
覆土は壁溝Ｂ（１層）、壁溝Ａ（２層）それぞれが１層に分かれる。１層は黒褐色シルト、２層は暗褐色シルトを基調とする。また、２層は焼土粒・炭化物を含む。

【遺物】

遺物は、壁溝Ｂ（１層）より須恵器片が１点検出された。内面に同心円状の当て具痕、外面に格子目状叩き目を施した甕の胴部破片である。

7. 小穴群

調査区北東隅にあたる H-2・3、I-1・2、J-2 グリッドにおいて、基本層序Ⅲ層（黒色粘質シルト）上面で 19 基の小穴が検出された。確認面の標高は、北側で 5.1 m、南側で 4.2 mを測る。そのうち、６基で柱痕跡が認められた。基本層序Ⅲ層は中世の確認面としているため、小穴群として掲載することとしたが、掘立柱建物跡や柵列の推定をし得る配列は確認できなかった。

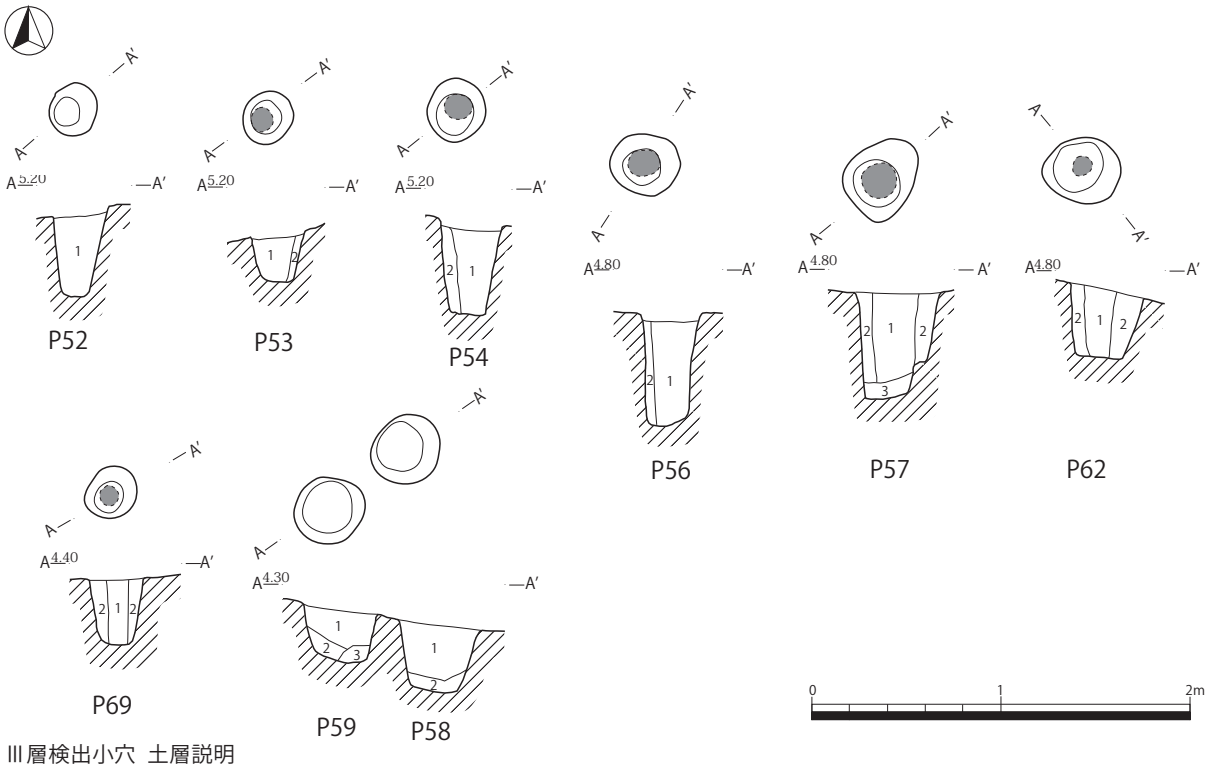


第 29 図　Ⅲ層検出小穴位置図（S=1/100）

第４表　Ⅲ層検出小穴一覧

番号	位置（グリッド）	平面形	規模〔cm〕			柱痕跡	備考
			長径	短径	深さ		
P52	H-2	円形	27		44	—	
P53	H-2	亜円形	28	26	27	有	
P54	H-2	亜円形	32	30	52	有	
P56	H•I-2	亜円形	36	34	60	有	
P57	H-2	楕円形	46	38	56	有	
P58	H-3	亜円形	38	34	38	—	
P59	H-3	亜円形	37	35	32	—	
P60	H-2	楕円形	60	49	54	—	
P61	H-2•3	楕円形	60	39	20	—	
P62	H-3	楕円形	40	34	38	有	

番号	位置（グリッド）	平面形	規模〔cm〕			柱痕跡	備考
			長径	短径	深さ		
P63	I-1	不整円形	41	40	29	—	
P64	I-1	楕円形	26	20	不明	—	
P65	I-1	楕円形	32	25	不明	—	
P66	I-1	亜円形	26	22	13	—	
P67	I-1•2	楕円形	32	26	不明	—	
P68	I-1	亜円形	30	26	24	—	
P69	I-1	亜円形	28	26	不明	有	
P92	J-2	楕円形	40	33	不明	—	
P93	J-2	亜円形	32	30	不明	—	



Ⅲ層検出小穴 土層説明

P52 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）
　　締まりやや強，粘性やや強．地山粒含む．

P53 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR2/3）《柱痕跡》
　　締まりやや強，粘性あり．地山粒微量含む．
P53 － 2　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《掘方》
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．

P54 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）《柱痕跡》
　　締まりやや強，粘性やや強．地山粒含む．
P54 － 2　黒褐色粘質シルト（10YR2/2）　《掘方》
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．

P56 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　　締まりやや強，粘性やや強．地山粒多量含む．
P56 － 2　黒褐色粘質シルト（10YR2/2）　《掘方》
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．

P57 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　　締まりやや強，粘性やや強．地山粒多量含む．
P57 － 2　黒褐色粘質シルト（10YR2/2）　《掘方》
　　締まりあり，粘性やや強．地山粒多量含む．
P57 － 3　褐色粘質シルト（10YR4/6）　《掘方》
　　締まり弱，粘性あり．小礫含む．

P58 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）
　　締まりやや強，粘性やや強．
P58 － 2　褐色粘質シルト（10YR4/6）
　　締まりやや強，粘性あり．

P59 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　　締まりやや強，粘性やや強．地山粒多量含む．
P59 － 2　褐色粘質シルト（10YR4/6）　《掘方》
　　締まりやや強，粘性あり．地山粒多量含む．
P59 － 3　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR5/4）《掘方》
　　締まりやや強，粘性あり．

P62 － 1　暗褐色粘質シルト（10YR3/4）
　　締まりあり，粘質やや強．地山粒少量含む．
P62 － 2　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）
　　締まりあり，粘性やや強．Φ 3cm 風化礫含む．

P69 － 1　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）　《柱痕跡》
　　締まり弱，粘性あり．
　　炭化物含む．風化礫微量含む．
P69 － 2　暗褐色粘質シルト（10YR3/3）　《掘方》
　　締まりあり，粘性あり．地山粒多量含む．

第 30 図　Ⅲ層検出小穴 平面図および土層堆積状況図（S=1/40）

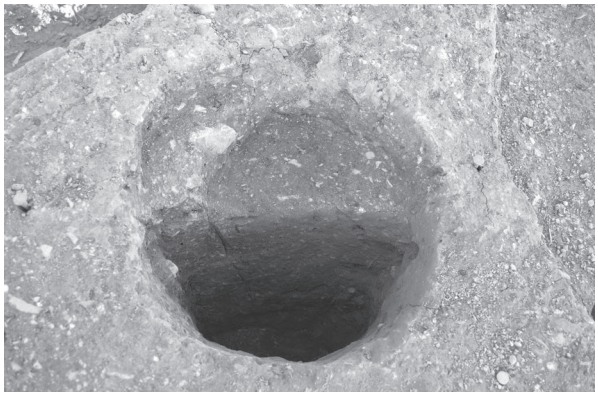


写真 42　P54 土層堆積状況（東から）

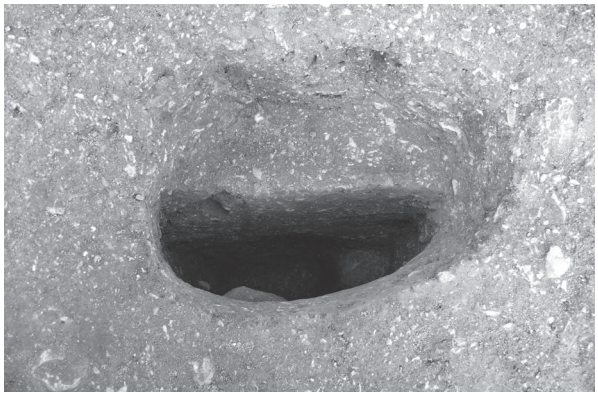


写真 43　P57 土層堆積状況（南から）

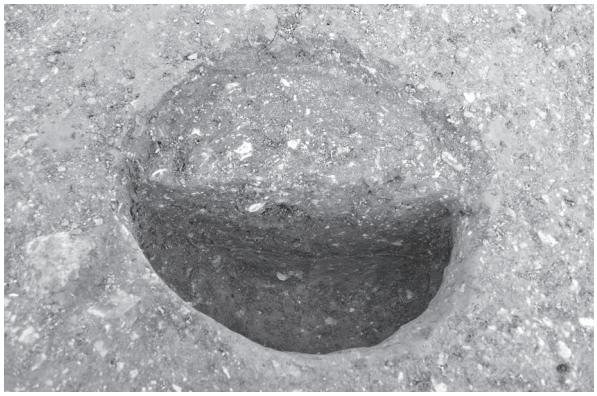


写真 44　P59 土層堆積状況（南から）

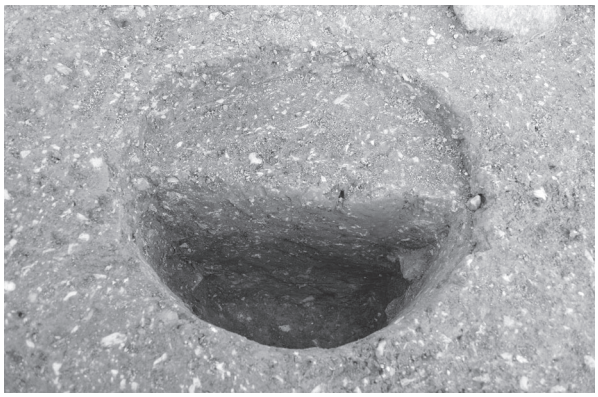


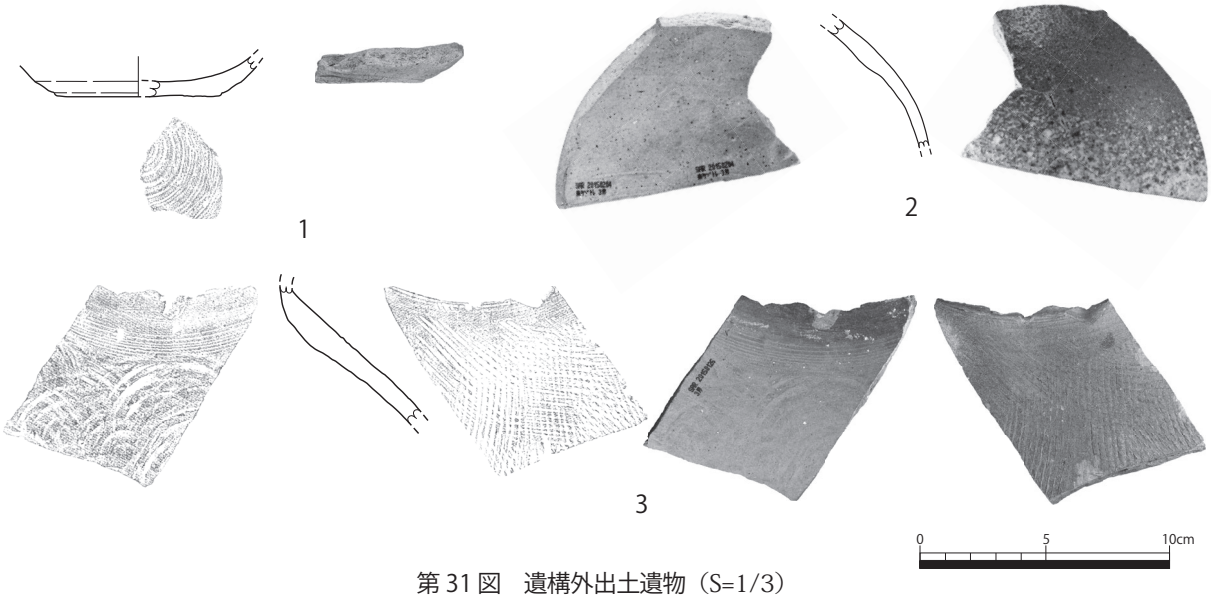
写真 45　P58 土層堆積状況（南から）

8. 遺構外出土遺物

遺構外で 14 点の遺物が検出された。そのうち、３点を図示した。

１は、土師器の坏の底部である。底面に回転糸切痕がみられる。

２・３は須恵器の甕の胴部である。２は、外面に自然釉がみられる。３は、内面に同心円状の当て具痕、外面に格子目状の叩き目が施されている。



第 31 図　遺構外出土遺物（S=1/3）

9. その他の遺構

今回の調査において、詳述した遺構のほかに、62 基の遺構が検出された。ほとんどが小穴であり、遺物の出土も少なく、時期等は判然としない。それらの遺構を第５表に一覧で示すこととする。なお、一覧表で掲載したのみの遺構についても、遺構配置図（第７図）には記してある。

第５表　検出遺構一覧

番号	位置（グリッド）	種別	平面形	規模〔m〕長	規模〔m〕短	備考
SD1	欠番					
SD2	F･G-4･5,G･H-3,H-4	溝状遺構	溝状	12.00	1.10	SX3 付帯施設
SD3	H-4,I-3･4	溝状遺構	溝状	4.00	0.20	
SI1	I-7	竪穴建物跡	壁溝一部	1.00	0.20	
SI2	H･I-5	竪穴建物跡	壁溝一部	2.50	0.45	
SK1	G･H-4	土坑	円形	0.98	0.96	
SK2	H-2	土坑	楕円形	1.08	0.92	
SK3	H･I-6	土坑	楕円形	1.32	1.18	
SK4	I-6	土坑	不明	1.70	0.50	
SK5	欠番					
SK6	I-6	土坑	楕円形	0.75	0.60	
SK7	H-5	竪穴建物跡	楕円形	0.68	0.62	SI2 貯蔵穴
SX1	E･F-2~4	段切遺構	不明	7.30	2.00	
SX2	G-2･3,H-2	段切遺構	不明	7.00	4.20	
SX3	F･G-4･5,G･H-3,H-4	段切遺構	不明	12.00	1.10	
SX4	欠番					
SX5	J-3	焼土跡	不整楕円形	1.70	1.20	
SX6	I-5	焼土跡	円又は楕円形	0.48	0.12	
SX7	H･I-2	焼土跡	円形	0.92	0.78	
SX8	I-6	焼土跡	円形	0.90	0.85	
P 1	F-3･4	小穴	楕円形	0.42	0.35	SX1 周辺
P 2	F-3	小穴	亜円形	0.42	0.37	SX1 周辺
P 3	E-3	小穴	亜円形	0.28	0.26	SX1 周辺
P 4	E-3	小穴	楕円形	0.30	0.18	SX1 周辺
P 5	F-3	小穴	亜円形	0.39	0.37	SX1 周辺
P 6	F-3	小穴	楕円形	0.31	0.26	SX1 周辺
P 7	F-3	小穴	亜円形	0.40	0.36	SX1 周辺
P 8	F-3	小穴	亜円形	0.46	0.42	SX1 周辺
P 9	F-3	小穴	亜円形	0.32	0.28	SX1 周辺
P10	F-3	小穴	楕円形	0.40	0.34	SX1 周辺
P11	F-3	小穴	楕円形	0.42	0.34	SX1 周辺
P12	F-3	小穴	楕円形	0.48	0.35	SX1 周辺
P13	F-3	小穴	亜円形	0.30	0.28	SX1 周辺
P14	F-3	小穴	楕円形	0.56	0.42	SX1 周辺
P15	F-3	小穴	楕円形	0.50	0.40	SX1 周辺
P16	F-2･3	小穴	亜円形	0.40	0.37	SX1 周辺
P17	G-2	小穴	不整形	0.60	0.48	SX1 周辺
P18	G-2	小穴	楕円形	0.30	0.24	SX1 周辺
P19	G-2	小穴	亜円形	0.42	0.40	SX1 周辺
P20	G-2	小穴	亜円形	0.36	0.32	SX1 周辺
P21	G-2	小穴	円形	0.30	0.30	SX1 周辺
P22	G-2	小穴	楕円形	0.40	0.34	SX1 周辺
P23	G-2	小穴	楕円形	0.58	0.40	SX1 周辺
P24	G-2	小穴	楕円形	0.40	0.32	SX1 周辺
P25	G-3	小穴	亜円形	0.34	0.31	SX1 周辺
P26	G-3	小穴	亜円形	0.36	0.32	SX1 周辺
P27	F-3	小穴	亜円形	0.34	0.33	SX1 周辺
P28	E-3	小穴	亜円形	0.38	0.36	SX1 周辺
P29	F-3	小穴	楕円形	0.44	0.37	SX1 周辺
P30	G-2	小穴	楕円形	0.42	0.32	SX1 周辺
P31	F-3	小穴	円形	0.36	0.36	SX1 周辺
P32	F-3	小穴	楕円形	0.47	0.30	SX1 周辺
P33	G-3	小穴	楕円形	0.48	0.40	SX1 周辺
P34	F-2･3	小穴	亜円形	0.34	0.24	SX1 周辺
P35	F-3	小穴	亜円形	0.28	0.24	SX1 周辺
P36	G-2	小穴	亜円形	0.34	0.32	SX1 周辺
P37	G-2	小穴	楕円形	0.32	0.26	SX1 周辺
P38	H-2	小穴	亜円形	0.20	0.18	SX1 周辺
P39	H-2	小穴	楕円形	0.35	0.28	SX1 周辺
P40	G･H-2	小穴	楕円形	0.28	0.20	SX1 周辺
P41	G-5	掘立柱建物	楕円形	0.32	0.25	SB1 柱穴
P42	G-5	小穴	亜円形	0.29	0.26	
P43	G-4	掘立柱建物	亜円形	0.30	0.29	SB1 柱穴
P44	G-4	掘立柱建物	亜円形	0.31	0.28	SB1 柱穴
P45	H-4	掘立柱建物	亜円形	0.31	0.28	SB1 柱穴
P46	H-4	小穴	亜円形	0.28	0.20	
P47	H-4	掘立柱建物	楕円形	0.42	0.36	SB1 柱穴
P48	G-5	掘立柱建物	亜円形	0.34	0.30	SB1 柱穴
P49	H-4	小穴	亜円形	0.19	0.16	
P50	H-4	小穴	楕円形	0.47	0.28	
P51	G-2	小穴	亜円形	0.30	0.26	
P52	H-2	小穴	円形	0.27	0.27	Ⅲ層検出
P53	H-2	小穴	亜円形	0.28	0.26	Ⅲ層検出
P54	H-2	小穴	亜円形	0.32	0.30	Ⅲ層検出
P55	欠番					
P56	H･I-2	小穴	亜円形	0.36	0.34	Ⅲ層検出
P57	H-2	小穴	楕円形	0.46	0.38	Ⅲ層検出
P58	H-3	小穴	亜円形	0.38	0.34	Ⅲ層検出
P59	H-3	小穴	亜円形	0.37	0.35	Ⅲ層検出
P60	H-2	小穴	楕円形	0.60	0.49	Ⅲ層検出
P61	H-2･3	小穴	楕円形	0.60	0.39	Ⅲ層検出
P62	H-3	小穴	楕円形	0.40	0.34	Ⅲ層検出
P63	I-1	小穴	不整円形	0.41	0.40	Ⅲ層検出
P64	I-1	小穴	楕円形	0.26	0.20	Ⅲ層検出
P65	I-1	小穴	楕円形	0.32	0.25	Ⅲ層検出
P66	I-1	小穴	亜円形	0.26	0.22	Ⅲ層検出
P67	I-1･2	小穴	楕円形	0.32	0.26	Ⅲ層検出
P68	I-1	小穴	亜円形	0.30	0.26	Ⅲ層検出
P69	I-1	小穴	亜円形	0.28	0.26	Ⅲ層検出
P70	G-5	掘立柱建物	円形	0.32	0.32	SB1 柱穴
P71	H-5	掘立柱建物	亜円形	0.35	0.32	SB1 柱穴
P72	H-4	掘立柱建物	円形	0.28	0.28	SB1 柱穴
P73	F-5	小穴	円形	0.20	0.20	
P74	H-5	小穴	亜円形	0.24	0.23	
P75	H-5	小穴	亜円形	0.26	0.24	
P76	H-5	小穴	亜円形	0.24	0.22	
P77	I-5	小穴	亜円形	0.26	0.23	
P78	H-5	竪穴建物跡	楕円形	0.40	0.33	SI2 柱穴
P79	I-5	竪穴建物跡	亜円形	0.30	0.27	SI2 柱穴
P80	H･I-5･6	小穴	楕円形	0.27	0.22	
P81	I-6	小穴	亜円形	0.32	0.27	
P82	I-5	小穴	亜円形	0.28	0.26	
P83	H-5	竪穴建物跡	亜円形	0.32	0.30	SI2 柱穴
P84	I-6	小穴	亜円形	0.24	0.22	
P85	I-6	小穴	亜円形	0.22	0.18	
P86	I-6	小穴	亜円形	0.24	0.22	
P87	I-2	小穴	楕円形	0.46	0.40	
P88	I-7	小穴	亜円形	0.30	0.28	
P89	J-6	柵列	亜円形	0.23	0.21	SA1 柱穴
P90	J-6	柵列	亜円形	0.24	0.21	SA1 柱穴
P91	K-5	柵列	亜円形	0.18	0.16	SA1 柱穴
P92	J-2	小穴	楕円形	0.40	0.33	Ⅲ層検出
P93	J-2	小穴	亜円形	0.32	0.30	Ⅲ層検出
P94	I-6	小穴	亜円形	0.26	0.24	
P95	H-5	竪穴建物跡	楕円形	0.22	0.20	SI2 柱穴
P96	H-5	竪穴建物跡	亜円形	0.22	0.20	SI2 柱穴

（　：抽出遺構）

第３章　自然科学分析

―猿喰東館跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）―

１．測定対象資料

猿喰東館跡は、宮城県気仙沼市最知北最知地内に所在する。測定対象試料は、SX5 から出土した木炭 1 点である（第６表）。

２．化学処理工程

① メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

② 酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第６表に記載する。

③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤ 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

⑥ グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

３．測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４．算出方法

① δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第６表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

② ^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第６表に、補正していない値を参考値として第７表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

③ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値

第６表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-143114	2	SX5　3 層	木炭	AAA	**-30.06 ± 0.25**	**590 ± 20**	**92.95 ± 0.27**

第７表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-143114	670 ± 20	91.99 ± 0.26	587 ± 23	1317calAD - 1354calAD (51.1%) 1390calAD - 1403calAD (17.1%)	1304calAD - 1365calAD (68.3%) 1384calAD - 1411calAD (27.1%)

を第６表に、補正していない値を参考値として第７表に示した。

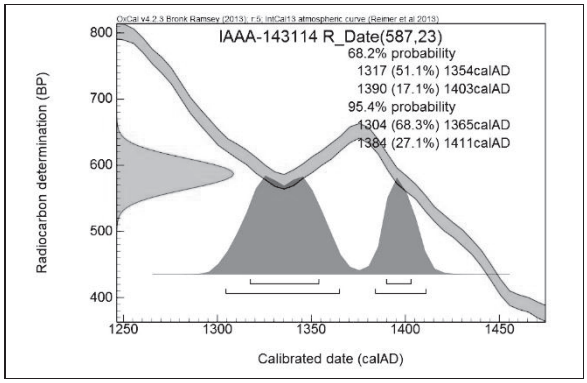
④　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

５．測定結果

測定結果を第６・７表に示す。

試料の ^{14}C 年代は 590 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 1317 ～ 1403cal AD の間に 2 つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は 60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。



第 32 図　暦年較正年代グラフ（参考）

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第４章　まとめ

今回の発掘調査地点は、猿喰東館跡の南西端にあたり、本遺跡においては、平成元年･23 年･24 年（２地点）・25 年につづき、６地点目の調査である。これまでの調査においては、平成元年および 25 年調査地点で堀跡、掘立柱建物跡、門跡などの遺構が検出されている。

本調査地点においては、段切状遺構、掘立柱建物跡、柵列、焼土跡、土坑、小穴、竪穴建物跡が検出された。

段切状遺構は、おおよそ東西方向に延びるかたちで３基検出された（SX1 ～ 3）。構築時期については明らかではないが、SX1 および SX3 は、掘り込みの壁際に溝を伴っており、形状が類似する。SX3 は、その南側で確認した掘立柱建物跡を囲むように構築されていることから、排水的な役割を果たしていたものと考えることができる。また、SX1 は多数の小穴を囲むように構築されていることから、同様の目的で構築したものと想定できる。当該地の旧地形が北西から南東に向かって傾斜していることからみても、その蓋然性は高いと思われる。

掘立柱建物跡の柱穴からは南西隅の P70 から中世陶器破片、棟持柱と推定した P41 から刀子が検出された。このことら、掘立柱建物跡は本館跡に伴うものであり、段切状遺構も同時期に帰属するものと推察できる。

焼土跡は４基（SX5 ～ 8）検出された。いずれの遺構においても焼土および炭化物が検出された。そのうち、SX5 で検出された炭化物について年代測定を行った結果、14 世紀代から 15 世紀初頭頃のものであるとの結果が得られた。SX5 は、基本層序Ⅲ層で検出されたもので、ほかの焼土跡も同様である。焼土跡のうち、SX5 および SX6 で、細片であるため年代等は明らかにし得なかったが、土師質土器（製塩土器）が検出された。このことから、焼土跡は、製塩に伴う遺構と推察できる。また、調査区北東部において 19 基の小穴が基本層序Ⅲ層で検出されており、これらの遺構も焼土跡とほぼ同時期に帰属するものといえる。

猿喰東館は、文献史料等により、天正 16 ～ 18（1588 ～ 1590）年頃までは機能していたと考えられている。今回の発掘調査の成果では、焼土跡や小穴の一部が 14 世紀から 15 世紀初頭の所産であることが推察できた。これらの遺構が館に伴うものと推定すると、猿喰東館は熊谷氏が葛西氏に臣従した前後には築かれたと想定できる。しかし、これまでの調査も含めて、年代を推定し得る遺物は極めて少ない。より詳細な検討をするには、今後の資料の増加を待たなければならない。

本調査において、館跡に伴う遺構のほかに、竪穴建物跡が１軒検出された（SI2）が、極めて遺存状況が悪く、壁溝の一部、貯蔵穴、柱穴５本が確認できたのみであった。壁溝は、二重に重複して検出されたことから、規模等は不詳であるが、建替えが行われたものと推察できる。また、旧壁溝で須恵器片が１点検出され、本遺構は、奈良・平安時代に帰属するものと推測できる。本遺跡の西側 100 ～ 300m ほどに古代の遺跡として登録している緑館遺跡が所在されており、その関連性も検討する必要があろう。

(註) 第１・２章

(註 1)　「猿喰東館跡」『宮城県文化財調査報告書第 135 集　寂光寺跡ほか』宮城県教育委員会，1990

(註 2)　現在報告書作成中。

(註 3)　「第９章　猿喰東館跡」『気仙沼市文化財調査報告書第 14 集　気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書２』気仙沼市教育委員会，2019

【引用・参考文献】第１・２・４章

唐桑町（1968）『唐桑町史』
気仙沼市（1988）『気仙沼市史Ⅱ　先史・古代・中世編』
気仙沼市（1998）『気仙沼市史補遺編　考古・古文書等資料』
気仙沼市教育委員会（1976）『宮城県気仙沼市文化財調査報告書　塚沢横穴古墳群』
気仙沼市教育委員会（1980）『宮城県気仙沼市文化財調査報告書第２集　南最知遺跡発掘調査概報』
気仙沼市教育委員会（1982）『宮城県気仙沼市文化財調査報告書第３集　塚沢横穴古墳群Ｂ地区発掘調査報告書』
気仙沼市教育委員会（1982）『宮城県気仙沼市文化財調査報告書第４集　内の脇２号貝塚発掘調査概報』
気仙沼市教育委員会（2016）『気仙沼市文化財調査報告書第８集　嚮館跡』
気仙沼市教育委員会（2019）「第９章　猿喰東館跡」『気仙沼市文化財調査報告書第 14 集　気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書２』
紫桃正隆（1973）『仙台領内古城・館第二巻』宝文堂
東北歴史資料館（1989）『東北歴史資料館資料集第 25　宮城県の貝塚』
宮城県教育委員会（1979）「南最知遺跡」『宮城県文化財調査報告書第 57 集　宮城県文化財発掘調査略報（昭和 53 年度分）』
宮城県教育委員会（1990）「猿喰東館跡」『宮城県文化財調査報告書第 135 集　寂光寺跡ほか』
本吉町（1982）『本吉町誌』

報告書抄録

ふりがな	さるはみひがしたてあと
書名	猿喰東館跡
副書名	防災集団移転促進事業（最知川原第二地区）に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	気仙沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 20 集
編著者名	石川　郁　　鈴木實夫　　株式会社 加速器分析研究所
編集機関	気仙沼市教育委員会
所在地	〒 988-8502　　宮城県気仙沼市魚市場前 1 番 1 号　　TEL　0226-22-3442
発行年月日	2020 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	（調査次数）	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
さるはみひがしたてあと 猿喰東館跡	（平成 26 年度 第 1 次）	みやぎけんけせんぬまし 宮城県気仙沼市 さいちきたさいち 最知北最知	042056	59045	38° 51′ 10″	141° 34′ 45″	20150119～ 20150213	109.0㎡	本発掘調査

所収遺跡名	（調査次数）	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
猿喰東館跡	（平成 26 年度 第 1 次）	城館跡	中世	段切状遺構 3， 掘立柱建物跡 1， 柵列 1， 焼土跡 1， 土坑 4， 竪穴建物跡 1， 溝状遺構 2， 小穴 78	陶器 1， 金属製品（刀子）1， 土師質土器(製塩土器)7， 須恵器 6，土師器 2， 縄文土器 6，石器 1 ※確認調査出土遺物含む	猿喰東館跡包蔵地の南西隅、一部包蔵地外（隣接地）の調査

要約

猿喰東館跡は、気仙沼湾に面した丘陵上に立地し、中世の城館跡として周知されていた。過去の調査では、堀跡、建物跡、門跡などが検出されている。今回の調査は、防災集団移転促進事業に伴うものであり、確認調査の結果、遺構が確認された箇所周辺について本発掘調査を実施した。

調査の結果、排水目的の可能性が想定できる段切り状遺構、掘立柱建物跡、焼土跡などが検出された。焼土跡内には焼土および炭化物が多量に含まれており、その一部について、放射性炭素年代測定を実施した結果、14 世紀～ 15 世紀初頭という結果が得られた。焼土跡からは細片であるが製塩土器と推察できる土師質土器が出土しており、中世の製塩関係の遺構である可能性も考えられる。

今回の調査では、竪穴建物跡が検出されており，壁溝から須恵器が出土している。周辺の遺跡（隣接する緑館遺跡など）との関連性も検討する必要がある。

気仙沼市文化財調査報告書第 20 集

猿喰東館跡

－防災集団移転促進事業（最知川原第二地区）に伴う
発掘調査報告書－

発　行　日	2020 年 3 月 31 日
編集・発行	宮城県気仙沼市魚市場前１－１ 気仙沼市教育委員会
印　　刷	岩手県一関市上大槻街３－１１ 川嶋印刷株式会社